美作国府跡発掘調査報告

―― 総社・小原線道路改良工事に伴う発掘調査 ――

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第15集

1984

津山市教育委員会

美作国府跡発掘調査報告

—— 総社・小原線道路改良工事に伴う発掘調査 ——

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第15集

1984

津山市教育委員会

序

美作国は和銅6年（713）、備前国から北方6郡を割いて設置され、その国府は現在の津山市総社の台地を中心とした地区に置かれました。国府の設置により津山は美作地方の政治・経済の中心となり、この津山の地位はその後も近世の城下町を経て現代に至っています。

現代に引きつがれた津山の歴史的位置は、このように律令体制という新しい社会の到来とともに奈良時代に形成されたといえます。その中核をなした美作国府跡については、中国縦貫自動車道の建設に先立つ岡山県教育委員会による発掘調査や市立鶴山中学校建設に伴う本委員会の発掘調査、あるいは地元研究者の方々による丹念な表面調査など、いくつかの調査が現在までに実施され、豊富な出土遺物や遺構から保存状態の良好な国府跡として知られています。しかし、先の諸調査も中心部の構造等を明らかにするには至らず、実態の解明は今後の課題としてなお将来の本格的な調査に残されています。

また、国府跡の位置する台地一帯の宅地化は急速に進んでおり、ここ10年程の間にみられる変貌には目を見張らせるものがあり、この市街地化の進行に対する抜本的な遺跡保存策の検討もまた急務であります。

今回の発掘調査もこうした宅地化の進行に伴う道路建設に関るものであり、国府跡のわずかな一画を調査したものにすぎませんが、木簡を初めとする多くの資料が得られ、美作国府跡のもつ豊かな内容の一端を示すものでした。

最後に、調査にあたり理解と協力そして指導をいただいた関係者各位に深甚の敬意を表するとともに、美作国府跡のさらなる調査と保存について、なお一層の御理解と御協力を願ってやみません。

昭和59年3月31日　　津山市教育委員会

教育長　福　島　祐　一

例　言

1　本書は津山市建設部が計画した総社・小原線道路改良工事にさきだつ事前調査として津山市教育委員会が実施した美作国府跡の発掘調査報告書である。調査対象地の行政区画は岡山県津山市小原18-3番地他である。

2　発掘調査は1982年度から1983年度にかけて、３次にわけておこなった。

3　調査は津山市教育委員会社会教育課が担当し、安川豊史が調査にあたり、国貞圭也、光延稲造、村瀬　隆が実測の一部を補助した。

4　本書で用いた方位は磁北である。レベル高は海抜高を示す。

5　本書第４図の作成にあたっては、植月荘介、高谷宗勝、河本　清氏の教示を得た。

6　本書第２図は建設省国土地理院発行５万分の１地図（津山東部・西部）を複製したものである。

7　本書の執筆と編集は安川があたり、調査資料の整理・検討において、湊　哲夫、中山俊紀、行田裕美の教示を得た。

目　　次

I　位置と環境 …… 1

II　調査の経過 …… 3

1 従来の知見 …… 3

2 調査経過 …… 4

III　遺　　跡 …… 7

IV　遺　　物 …… 11

1 土　器 …… 11

2 木製品 …… 25

3 金属・石製品 …… 28

4 瓦 …… 29

5 自然遺物 …… 31

V　考　　察 …… 32

1 遺　跡 …… 32

2 遺　物 …… 33

図　版　目　次

図版1　調査区遠景，T 1

2　T 1・T 2

3　T 4 旧河道

4　土壙群・弥生時代河道(T 6・7)

5　弥生時代河道(T 7)，T 8

6　土　器

7　土器・木製品・銭貨

8　平瓦・石器

挿図目次

第1図　位置図 …… 1
第2図　美作国府跡関連遺跡分布図(1：50000) …… 2
第3図　発掘調査区（1：1500) …… 4・5
第4図　美作国府跡関連遺跡調査地区・出土遺物(地図1：5000、遺物1：4、1：2) …… 6・7
第5図　T1・2平面・北壁面図（1：100) …… 7
第6図　T4平面・北壁面図（1：100) …… 8
第7図　弥生時代河道（1：100) …… 9
第8図　下層出土土器（1：4) …… 18
第9図　下層出土土器（1：4) …… 19
第10図　下層出土土器（1：4) …… 20
第11図　上層出土土器（1：4) …… 21
第12図　上層出土土器（1：4) …… 22
第13図　上層出土土器・弥生土器（1：4) …… 23
第14図　墨書土器・木製品（1：2、1：4) …… 26
第15図　T7弥生時代河道出土杭（1：4) …… 27
第16図　開元通宝（1：1) …… 28
第17図　弥生時代石器（1：2) …… 28
第18図　平瓦・須恵器拓影（瓦1：4、須恵器1：2) …… 30
第19図　T4旧河道出土土器（1：4) …… 32
第20図　勝央町戸岩窯址採集の勝間田焼（1：4) …… 35
第21図　小皿Cの糸切り痕（1：2) …… 36

表目次

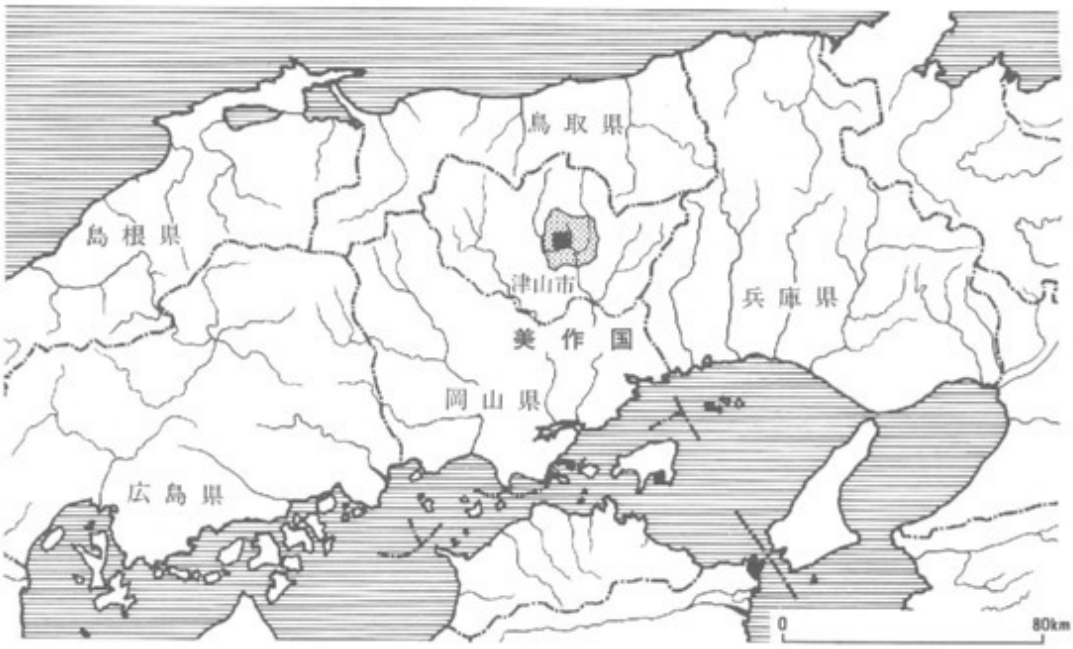
表1　下層出土土器の構成（須恵器・施釉陶器) …… 13
2　〃　（土師器・黒色土器) …… 14
3　上層出土土器の構成（須恵器・中国製磁器・備前焼) …… 16
4　〃　（土師器・瓦質土器) …… 17
5　丸・平瓦の構成 …… 29

Ⅰ　位置と環境

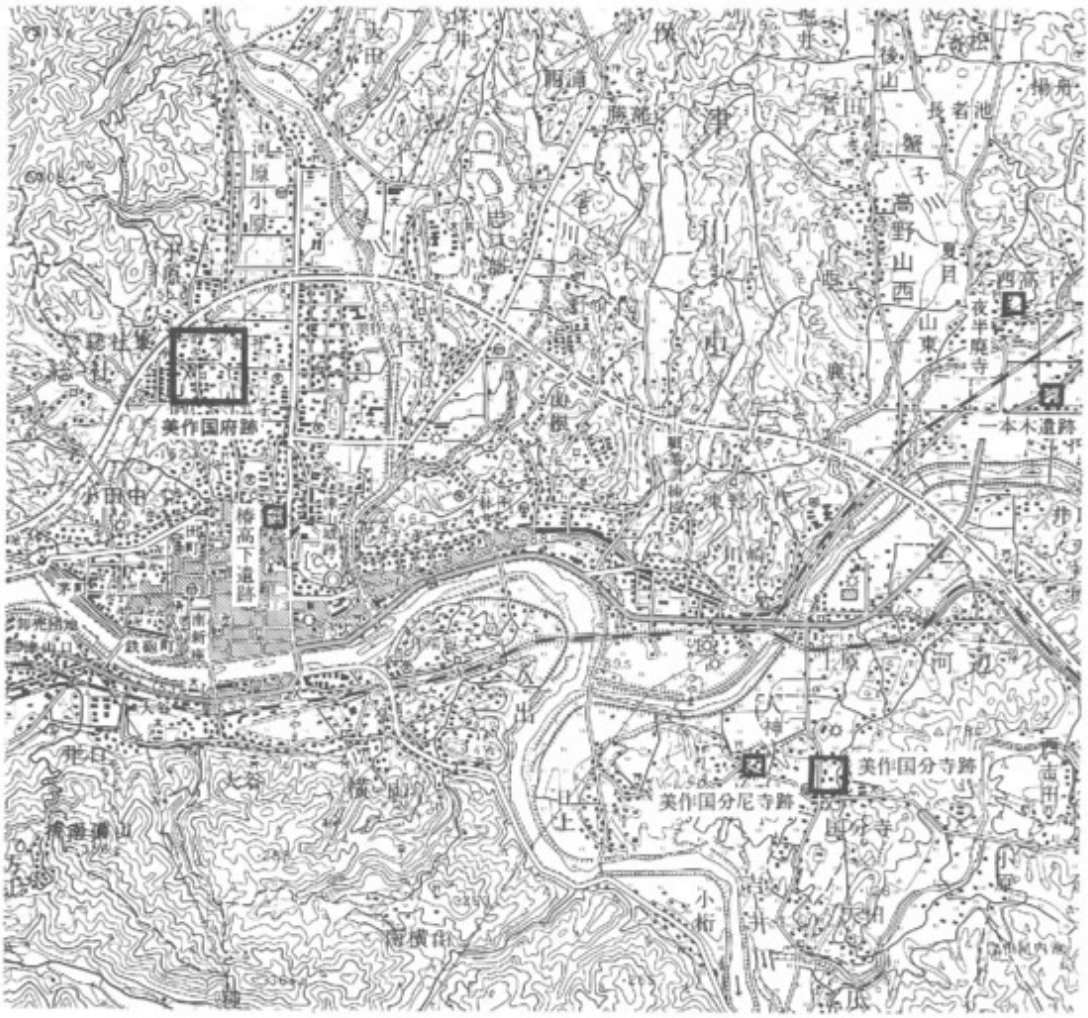
美作国は、中国山地を構成する標高1000ｍ前後の山々と標高500ｍの吉備高原との間に開けた盆地帯に位置し、東西80㎞、南北50㎞程の広がりをもつ。津山盆地を最大とするこれらの盆地帯には旭・吉井川の２大河川が貫流しており、美作国府跡は津山盆地のほぼ中央部、吉井川流域に所在する(第１図)。

津山市内を東に貫流する吉井川北岸部の市街地北方には、南下して吉井川と合流する宮川が形成した幅１㎞程の平地が南北に細長く広がっている。その東側には中国山地から南に派生した、平地との比高40ｍ前後の丘陵群が樹枝状に発達しており、西側では対照的に標高308ｍに達する神楽尾山塊が南北４㎞、東西２㎞の広がりをみせる。山塊の南東山裾には比高約10㎞の低丘陵が台地状に延び、平地に張り出している。台地縁辺には平地に続く小谷がいくつかみられるものの、東西幅200ｍ、南北500ｍをはかる平坦な広がりをもつ。台地西側に存在する独立丘には総社宮が位置し、台地北端は津山市小原に、大半は同総社に属する。美作国府跡は、この台地を中心として想定されている(第２・３図)。

台地の北および東方には平地が開け、そこには条里地割が良好に遺存している。現在、台地北端部には中国縦貫自動車道が北東から南西に走り、一帯は宅地化が進行しており、国府跡の中心部とみられる台地上は特に著しい。



第１図　位置図（角印　美作国府跡）



第２図　美作国府跡関連遺跡分布図　１：50000

美作国府跡に関連する周辺の遺跡として、美作国分僧寺と同尼寺がある。二寺は、国府跡の約4.5km南東、吉井川の左岸にある台地上に位置し、過去数次にわたる発掘調査によりその概要が判明している。その他に遺跡の性格が確定できないが、夜半廃寺・一本木遺跡・椿高下遺跡があげられる。夜半廃寺・一本木遺跡は津山市高野本郷の、吉井川の支流である加茂川右岸にあり、前者からは平安時代と思われる瓦が、後者からは川原寺式と思われる瓦がそれぞれ出土したのみである。椿高下遺跡もまた国分寺系とみられる瓦が知られるだけで、寺院とは断定できない。

II 調査の経過

1 従来の知見

美作国府跡の所在地については、台地中央部の地籍のひとつ、幸畑（こうばた）の「幸」が国府の転訛とする考えと、瓦や土器等の出土の2点を根拠として、すくなくとも明治初期には本地域に比定する考えがあった(註1)。

その後、中国縦貫自動車道の建設に先立ち、台地北方の一画が1971年から翌年にかけて岡山県教育委員会によって発掘調査された(第4図A、註2)。ここからは掘立柱建物群や築地址、井戸等が多量の遺物と共に発見された。出土遺物の中には、国司を構成する官職名のひとつ、「少目」が書かれた墨書土器や陶硯、木簡等の官衙的様相をもつ遺物があり、さきの比定を裏付けたといえる。さらに出土土器の検討から国府存続期は、奈良時代～平安時代初期、平安初期～同末期、平安末期～鎌倉時代初期の3時期に大別された。一方、台地南方に南東から入りくんだ高橋谷と呼ばれる地区を中心とした発掘調査が1976年から翌年にかけて津山市教育委員会によって実施された(第4図B)。字名をとって高橋谷遺跡と名付けられたこの調査区では、広い整地面と東に延びた台地の裾を巡る幅3～4mの大溝が建物や井戸と共に検出された。整地面と大溝からは勝間田焼（平安末から中世にかけての須恵器）などが出土し、これらは同一時期とみられている(註3)。その他に国府跡推定地周辺で3箇所の発掘調査が行なわれた（第4図C・D・G)。台地中央部の小試掘調査（G）では、東西に延びた幅2m前後の溝が検出され、奈良時代の須恵器杯（6）が出土した。北西丘陵部調査区（C）では国府関連遺構は検出されず、一丁田遺跡の調査区では蛇行しながら北から南に延びた幅2～2.5mの溝が検出され、鎌倉時代のものと考えられている(註4)。

これらの諸調査に前後して台地上では特徴的な遺物が採集されたり、工事に伴って遺構が発見されている(第4図E・F・H・I・K・L)。南幸畑のEは国府台寺の本堂で、建て替えがおこなわれた際に地下から奈良時代から平安時代にかけての瓦が多く出土した。Fは畑地で、これまでに奈良時代須恵器・土師器・製塩土器が採集されている。製塩土器は薄手で倉浦式と呼ばれるものである。南幸畑からは、その他に円面硯（5）が須恵器杯（3・4）とともにH地点で、三彩もしくは二彩の破片（1）と軒瓦がK地点でそれぞれ採集されている。さらに、幸畑と高橋上にはさまれた浅い谷のL地点では墨書土器（2）が発見されている(註5)。三彩は波状の端面をもつもので、淡灰白色軟質の胎土に鮮やかな緑色釉と一部に黄白色釉が認められる。表面の端部および中央に線刻がみられるが器種不明である。墨書土器は高杯脚台で、内面に「厨」と書かれている。円面硯は上面径30.4cmをはかるもので、半分近い大形破片である。

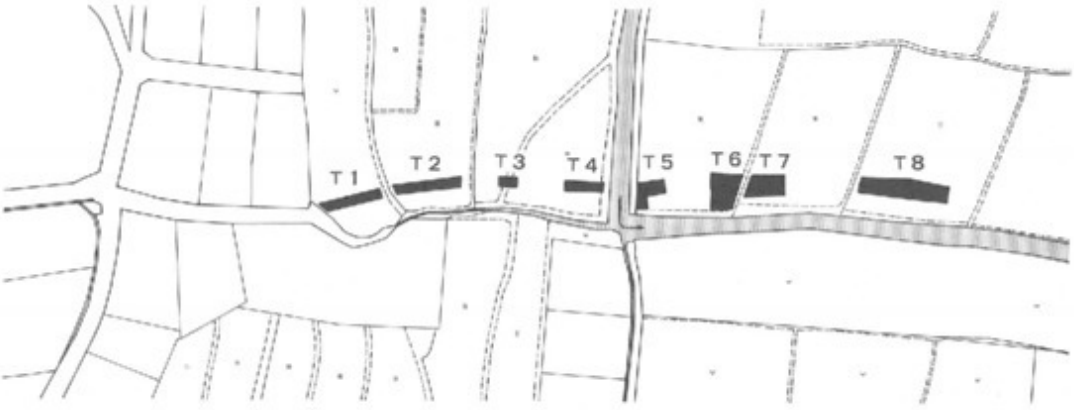
また、八子ノ上の西側、Ⅰ地点では土木工事に伴い、南北方向に並んだ大形の掘立柱柱穴が確認されている(註６)。

以上の所見に基づき、国庁域は南北幸畑・幸畑・才ノ神および客社のそれぞれ一部を含む方２町の範囲が推定されている(註７)。一方、国府域についてはさらに不明な点が多いが、北限を高橋谷で検出された大溝に、東限を溝ノ内と一丁田の間を境とする南北水路に求めようとする見解（註７）や、方６町の可能性を考える見解（註８）もある。いずれの見解も現在認められる条里地割を重要な根拠とするもので、国庁域の推定とともに中心部分の発掘調査が未実施の現状ではやむを得ないとはいえ、条里地割自体の検討が必要である。国府の存続期間についても十分な資料が提示されておらず、この検討もまた課題のひとつとして残されている。

2 調査経過

国庁推定地の一画、南北幸畑の間を東西に走る道路の延長路線建設計画が1982年に明らかとなった。工事主体者は津山市で、現行の道路を真東に延長し、市街地中央部を南北に貫通している市道600号線に接続しようとするものである。工事予定区間の全長304ｍ、総面積2656ｍをはかる。幅員６ｍの道路を側溝部を除きすべて盛土により建設するものであるが、計画ではどうしても一部の掘削をさけられないこと、そして路線が国府推定地内を通過することから津山市教育委員会では工事担当部局および岡山県教育委員会との協議を進め、事前に発掘調査を実施することとした。

発掘調査は1982年から1983年にかけ３次にわたって津山市教育委員会が実施した。実施にあたり、主要目的としたのは次の２点である。第１は国府域の調査である。調査予定地は国府推定地の東域を大きく横切るかたちとなったため、府域を示す何らかの施設がもし存在するのであれば、調査で検出することができると考えられた。前項で触れたように、府域東限の可能性



第３図　発掘調査区　１：1500

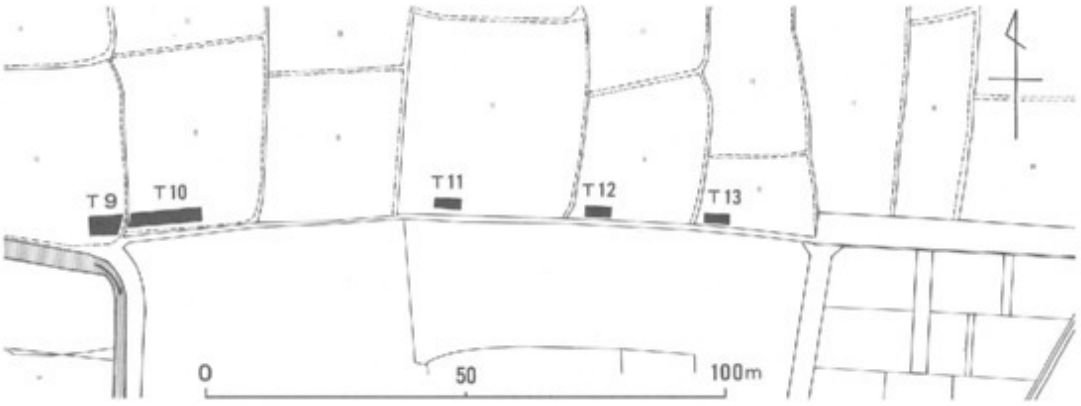
があると現在考えられているのは溝ノ内と一丁田を画する南北の地割線である。従って、この条里地割の起源を追求することも必要になってくる。第２点は国府存続期の確認である。これはいうまでもなく、中心部である国庁の調査なしには不可能であるが、周辺の土地利用のあり方の変遷もそれ自体として確認することが必要であると考えられた。

第１次調査　調査期間1982年11月16日～1983年１月10日。調査面積70㎡。路線予定地の西端から東方に向い順に調査を進めることとし、トレンチ番号も同様に付けていった。条里地割に沿って流れている用水の西側を調査対象地として１から４までのトレンチ（以下略号で記す。）を調査した。西端のＴ１では堆積層が最も厚く、隣地が耕作中の畑地で十分な排土置場がとれず、発掘範囲を次第にせばめざるを得なかった。Ｔ１から３まで遺構はほとんど検出されず、堆積層も次第に薄くなり、Ｔ１・２でみられた平安期の遺物包含層はＴ３以東では認められない。Ｔ４で現行用水の旧河道を検出し、形成時期についての一定の所見を得た。

第２次調査　調査期間1983年４月25日～６月14日。調査面積 146㎡。Ｔ５からＴ８までを調査。Ｔ５で期待した用水旧河道は調査区内にはみられず、Ｔ６・７で弥生時代の自然河道を検出した。河道には多数の杭が打ち込まれていたが、土器の出土はそう多くない。Ｔ８で２条の溝を検出したほか、Ｔ５～Ｔ７で多数の土壙を検出した。壙底には砂層の薄い堆積が認められ、遺物から近世以降の野つぼと考えられた。

第３次調査　調査期間1983年９月19日～11月10日。調査面積89㎡。Ｔ９からＴ13までを調査。Ｔ９・10は従来国府域の東限の可能性を指摘された位置にあり、Ｔ９では試掘幅を他より広く設定し、遺溝検出にそなえたが、国府関係の遺構はみられず、中世の水田址らしいものを検出した。Ｔ９東部以東では中世の堆積層下に暗褐色土からなる自然層が次第に厚く認められた。

以上、壁面の崩落に悩まされながら計13トレンチ、総面積305㎡を調査して全体の調査を終了した。発掘調査にあたった体制は次の通りである。



発掘調査体制

調査主体　津山市教育委員会

調査責任者	津山市教育委員会教育長	福島　祐一		
調査担当者	教育委員会参事兼社会教育課長	須江　尚志		
調　査　員	社会教育課主事	安川　豊史		
	補助員	国貞　圭也	光延　稲造	村瀬　隆
事務担当者	社会教育課文化係長	森元　弘之		
	嘱　託	杉山　紀子		
整理担当者		安川　豊史		
	整理技術員	日笠　月子	飯田　和江	
	整　理　員	管　ひとみ	斎藤　純子	
発掘作業員		大郷　貴美子	高谷　久枝	竹内　悦子
		竹内　忠	長尾　達夫	日笠　あさ代
		益田　梅子	益田　賢一	宮本　清次郎
		宮本　玉代		

調査および報告書作成にあたっては、下記のかたがたから御協力、御教示をいただいた。記してあつく感謝の意を表する。

伊藤　晃　稲田　孝司　岩本　正二　植月　荘介　岡田　博　長船　忠夫
鬼頭　清明　河本　清　近藤　義郎　篠原　芳秀　高畑　知功　高谷　宗勝
巽　淳一郎　福田　正継　吉田　晶

註

(1)　国府台寺に現存する明治14年（1881）10月建立の「国府遺址碑」による。

(2)　岡山県教育委員会「美作国府」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』）1973　pp.1～54

(3)　河本　清・岡田　博「美作地方の官衙」（『佛教藝術124号』）1979　pp.102～105 および中山俊紀氏の教示による。

(4)　岡田　博「岡山県立津山工業高校プール建設に伴う山北一丁田関連遺跡の調査」（『岡山県埋蔵文化財報告13』）1983　pp.100～106

(5)　第4図1・2は植月荘介氏、同3～5は高谷宗勝氏の採集品。

(6)　河本　清・高谷宗勝・中山俊紀氏の教示による。

(7)　註2文献

(8)　湊　哲夫『美作国分尼寺跡発掘調査報告』1980

A　1971・2年　岡山県教育委員会発掘調査地区

B　1976・7年　津山市教育委員会発掘調査地区（高橋谷遺跡）

C　1981年　津山市教育委員会発掘調査地区

D　1982年　岡山県教育委員会発掘調査地区（山北一丁田遺跡）

E　奈良～平安時代瓦出土地点

F　奈良時代須恵器・土師器・製塩土器採集地点

G　1974年　津山市教育委員会試掘調査地点（須恵器6）

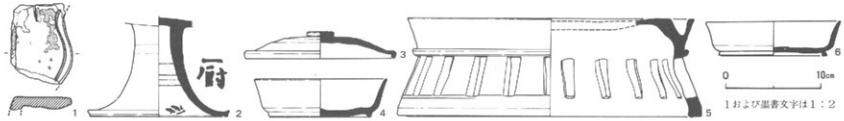
H　須恵器3・4・5出土地点

I　掘立柱群

J　今回調査地区

K　三彩(?)1採集地点

L　黒書土器2採集地点



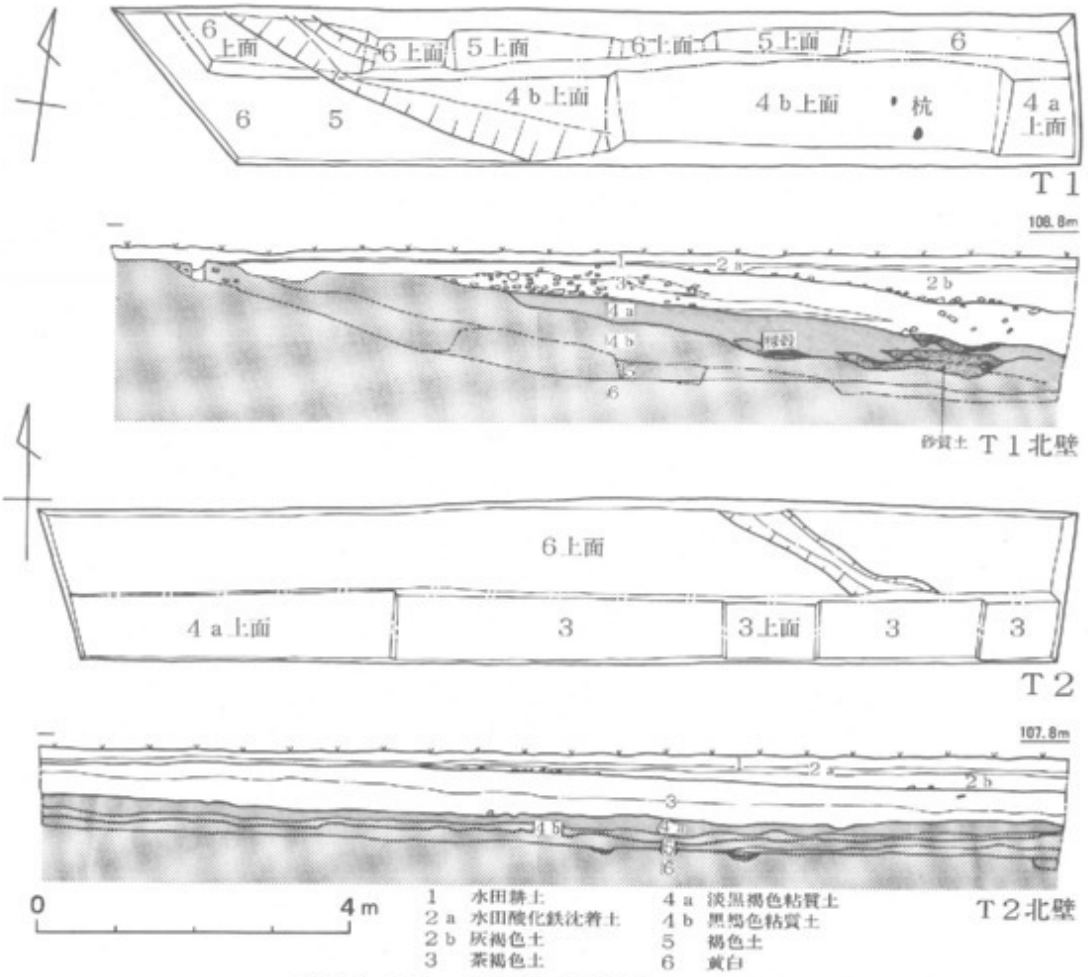
1および墨書文字は1：2

第4図　美作国府跡関連遺跡調査地区・出土遺物　（地図1：5000，遺物1：4，1：2）

Ⅲ 遺　　跡

調査によって検出した国府関連の遺構は杭列が認められたのみで、他に条里地割に沿って流れている用水の旧河道、弥生時代の河道、そして近世以降とみられる多数の土壙を検出したにすぎない。遺跡の大部分は地点によりかなり差はあるものの概して遺物を多く含む包含層の堆積からなる。この堆積層は大別して上下２層に分かれる。以下、トレンチごとに記述する。

Ｔ１（第５図、図版１・２）　調査区の西端、国庁推定地である幸畑・客社を中心とした台地から10ｍ程の比高差をもって下る斜面裾部に位置する。排土置き場が限られたため、自然層まで掘り下げたのは、トレンチの約３分の２であったが、４ａ層（平安期）と３層（中世）を中心に豊富な遺物の出土をみた。自然層（４ｂ層以下）の西半は、現代の水田造成により削平

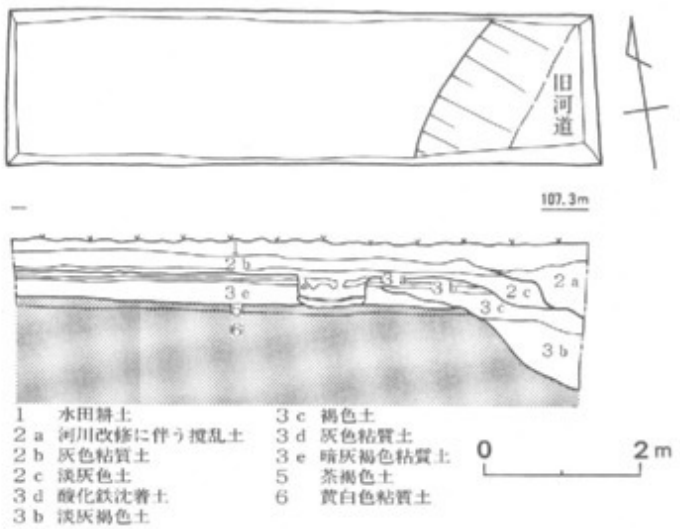


第５図　Ｔ１・２平面・北壁面図　１：100

を受けている。国府期の地表面は４ｂ層上面で、北東に向って下降する斜面となっていた。4b層は、いわゆる黒ボクであり、国府期以降３層堆積の時期までこの地点が自然地形を大きく改変しないまま残されていた様子を示している。４ａ層も４ｂ層に似た粘質土からなり、黒ボクを主体とする。一部に水が流れた痕跡を示すレンズ状の砂層堆積がトレンチ東端近くで認められたが断面形は不規則であり、明確な溝をなすものではなかった。堆積状態からみて、水流は南東から北西方向とみられ、砂層の広がりの西側に沿って２本の杭が４ｂ層に打ち込まれた状態で検出された。杭は下端部約15cmを残すのみで、上部は４ｂ層内で腐食していた。流水を意識した土留めの杭列とみられる。４ｂ層中からは多量の須恵器、土師器、加工痕をとどめた木片、種子とともに若干の木器、銭貨、瓦が斜面上方から投棄された状態で出土した。遺物は４ａ層上面から下底までまんべんなく分布し、層細分はできない状態で、ほぼ同一時期に形成された層と考えられた。ただ、やや東寄りの下底部には２～３cmの厚さの籾殻の堆積が径60cm程の広がりをもって、薄い焼土層とともに観察された。周辺から出土した木片には焼けた痕跡が認められ、同場所で焚火したことを示している。３ａ層は角礫を多く含み、堅くしまった人為的な造成土と考えられる。勝間田焼を初めとする多量の中世土器を包含し、中国製磁器もみられる。３ａ層下底面においてトレンチ西半部で北東方向に下る緩やかな段と、それに伴う溝の一部を検出した。２ｂ層も３ｂ層と同様に造成土と考えられるもので、下底部では角礫が特に多く認められた。本層以上には近世の陶磁器が含まれている。

Ｔ２（第５図、図版２）　トレンチの半分強を完掘したにすぎない。６層中に溝を検出したが、自然の小流路である。Ｔ１とほぼ同じ土層堆積を示すが、Ｔ２ではほぼ水平に近い。４ａ層は20cm前後と薄いが、Ｔ１同様、多くの土器、木片等が出土した。遺物はトレンチ西半に集中し、東にいくほど少なくなる。３層は自然礫を含むがＴ１にくらべ少なく、上下２層に分かれる。下半にはマンガンと思われる鉱物粒が多く認められ、上半にくらべやや褐色味が強い。２ｂ層下底部には礫が多くみられ、３層同様、造成土と思われる。２ｂ層以上には近世以降の陶磁器が含まれる。

Ｔ３　幅２ｍ、長さ3.5ｍの小トレンチで、１・２に比べ堆積層は薄い。３層は上下に分かれ、４層は暗褐色土層で、１・２の４ａ層と同一層と思われる



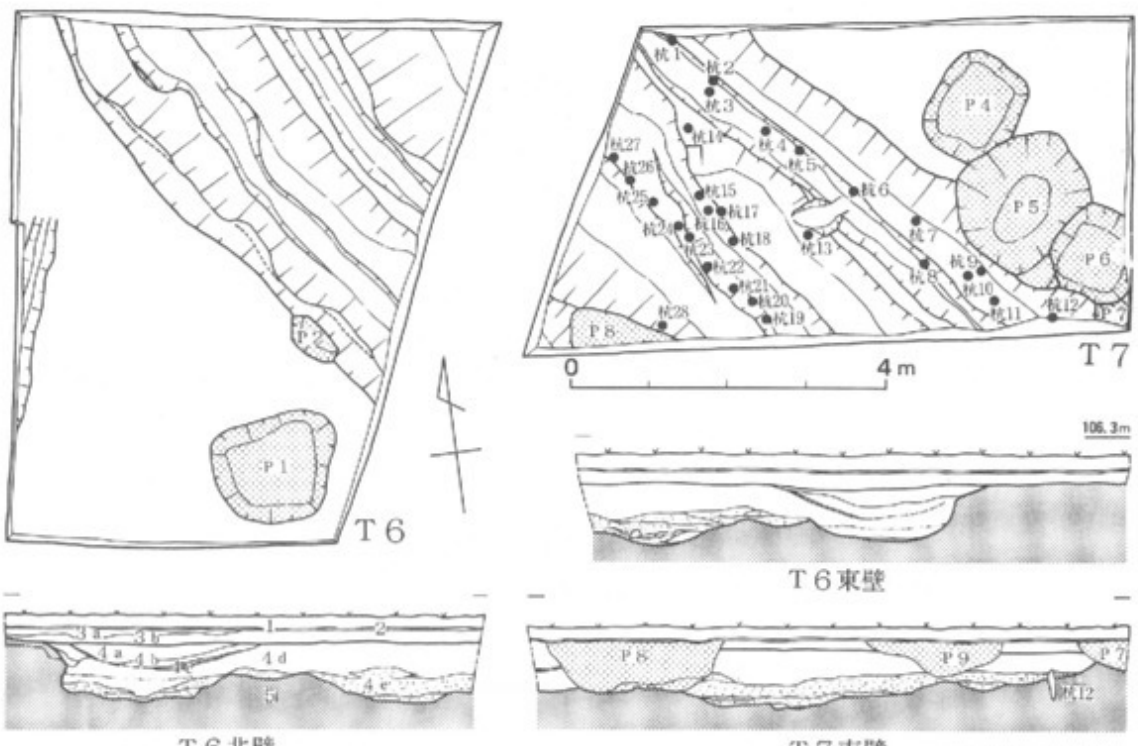
第６図　Ｔ４平面・北壁面図　１：100

が、５～10cmと薄く、遺物は含まない。３層中から若干の中世土器が出土したのみで、遺構は検出されなかった。

Ｔ４（第６図、図版３）　２枚の現代の水田層（１、２ｂ・２ｃ層）の下には中世土器を包含した３層が水平に堆積している。３層はさらに細分されるが、その下は自然層で、Ｔ１・２の４ａ層にあたる平安期の土層は本トレンチでは確認されない。トレンチの西側を流れる用水の旧河道の一部を西端部で検出した。旧河道の現存する深さは0.7ｍをはかり、東壁の立ち上りは３層の中で終っている。河道底面の砂層中から勝間田焼等の土器を検出した。

Ｔ５　近世以降の土壙を検出しただけで、遺構は認められない。水田耕土から自然層までの堆積も薄く、遺物もほとんど出土しなかった。

Ｔ６・７（第７図、図版４・５）　北西から南東方向の弥生時代河道を検出した。河道最大幅は6.8ｍ、深さ0.7ｍをはかる。川底の形状から大きく２つの流れにわけられ、南西側の幅2.5ｍ程の部分には底部から順に砂質土、有機物を含む粘質土が堆積し、やや澱んでいた様子を示すのに対し、北東側では砂礫の粒径が大きく、かなりの流水があったと思われる。Ｔ７の川底に計28本の杭が打ち込まれていた。杭の位置は水流の方向に並ぶ傾向があるほかは規則性は認められない。ただＴ６では全く検出されず、全体的には集中していたと考えられ、水の統御に



１　水田耕土　　３ａ　灰色土　　４ａ　暗灰色土　　４ｃ　暗灰色砂　　４ｅ　灰色砂礫土
２　水田酸化鉄沈着土　　３ｂ　暗灰色土　　４ｂ　黒色粘質土　　４ｄ　灰褐色土　　５　黄白色粘質土

第７図　弥生時代河道　１：100

関する堰の一部であった可能性が強い。いずれも堆積土中には10cm内外を残すのみだが、地中に40～50cm程の深さでしっかりと打ち込まれていた。河道内の堆積土（４層）中からは、中期中葉から後期後葉にいたる弥生土器が少量検出されたが、それ以降の遺物は全く含まれない。発掘は上中下の３層に機械的に分けて掘り下げたが、下層にいく程、土器の年代が古くなる傾向が認められた。このことから杭群は中期中葉に属する可能性が強いが、土器の総量が少なく直ちに断定できない。ここでは後期後葉までの長い幅をもって考えざるを得ない。旧河道は、その堆積土とともに上面を削平されており、上に中世以降の土層（３層）が乗る。３層上面で検出した計８基の土壙は３層を切り込んでいる。

Ｔ８（図版５）　水田耕土と鉄分沈着層の下には中世土器を含む灰色土層（３層）があり、その下は自然層が続く。３層は局部的に認められ、トレンチ西端近くには存在しない。自然層の上面は削平を受けている。３層下面から自然層に掘り込まれた２条の溝を検出した。いずれもしっかりしたものだが、時期・性格等は不明である。

Ｔ９　現在の水田耕土層および酸化鉄沈着層の下に0.45ｍの厚さの灰褐色土層（３層）があり、その下には淡黄色粘質土層（４層）がくる。４層は自然層で、３層中には中世土器が少量包含されている。３層は上下２層に細分でき、その境界付近に酸化鉄沈着層が、そして上下にはマンガンと思われる褐色鉱物粒の沈着が認められた。トレンチ中央西寄りの４層上面に砂質土からなる幅1.4～0.6ｍ、高さ0.2ｍの畦状高まりが南北方向に検出された。この高まりは、北方ほど幅を減じ、そのほぼ中央からもう１条の畦状高まりが西に延び、トレンチ西壁下に続いている。これは幅0.5ｍ、高さ0.1ｍをはかる。さらに南北方向の高まり以西の４層上面には長径10～12cm、短径７～８cmの楕円形の灰色斑文が密集して認められた。個々の斑文内には、酸化マンガンとみられる褐色斑粒が密集して沈着していた。断面は3～4cmの深さでレンズ状にくぼみ、この斑文が稲株痕であった可能性が高い。ただ畦状高まりは、土質の点で水田遺構の畦畔とは断定できない。いずれにせよ、以上のことから中世においては本地点が水田として利用されていたと考えられる。他に３層上面から切り込まれた近世以降の土壙１基をトレンチ北東隅で検出した。

Ｔ10　Ｔ９とほぼ同様の層序をもつ。３層下面とＴ９の４層に相当する淡黄色粘質土層（５層）の間に暗茶褐色土層がトレンチ東部にあらわれ、東側に次第に厚く延びていく。この４層中からは遺物は検出されず、自然層と考えられる。

Ｔ11・12・13　いずれも小トレンチで、層序はＴ10の東部と同様である。すべてのトレンチから近世以降の土壙が検出された。

Ⅳ 遺　　物

今回の調査では、一部奈良時代を含み、平安時代、中世を主体とする土器をはじめ、瓦、木製品、金属製品、石製品のほか動物・植物遺体など豊富な遺物が出土した。美作国府に関連するとみられる遺物は、前章で述べたように上下2層に分かれて検出された。国府関連の土器については層位別に分けて記述し、次いで木製品、金属製品、石製品、瓦等の順で述べる。

1 土　　器

A　下層出土土器（第8・9・10図、図版6）

T1・2の4a層から出土したもので、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、土師器、黒色土器にわけられる。須恵器・土師器総数の90%以上がT1に集中して出土した。

須恵器　杯A・B・C、同B・C蓋、皿A・D、同B蓋、椀A・B・C、高杯、壺、甕がある。

杯A（37～43）　高台を持たないものを一括したが、底部から口縁部への移行が丸味をもつもの（37・38・40）と、明瞭な稜線をもつものとに区別される。前者では底面をヘラ切りした後になでて調整するが、後者には水平な不定方向のヘラ削り成形をおこなうもの（41）もある。口縁部の立ち上りも後者では緩い傾向をもつ。通常の須恵器の焼成状態のものと、灰白色のやや軟質のものとが認められる。

杯B（59～69）　高台をもつもので、高台が外に張り出したしっかりした形態のもの（59・60）と高台の稜線が丸味を帯びるものとに大別され、後者が圧倒的に多い。いずれも焼成は良好で杯Aの一部にみられた灰白色軟質の焼成はみられない。60は口縁部形態が丸味をもち、内側に傾斜する口縁端面を示す特徴的なもので1点だけ認められた。

杯B蓋（46～55）　平らな頂部からやや屈曲して縁部にいたる形態がほとんどである。頂部に付くつまみは厚味のある碁石状の形態が多いようである。52・53は灰白色軟質の焼成である。

杯C（70～73）　底部から弯曲して上方に延びた口縁部が途中で稜をもって外反する形態のもので、高く立ち上った高台をもつ。いわゆる佐波理鋺模倣土器とみられ、いずれも精良な胎土を用い、良好に焼成されている。

杯C蓋（57）　高台を逆転した形態のつまみがつくもので、図示した他に頂部から縁部への移行部付近の破片が1例ある。この移行部外面は細い隆線をめぐらせている。

皿A（44・45）　高台をもたない皿で、杯A同様に底部から口縁部への移行は2者にわけられる。移行部が丸味をもつ44では、底外面はヘラ切り後なで調整をおこなうが、45では水平なヘラ削り成形をおこなう。口径はそれぞれ13.2、15.6cmをはかる。

皿B蓋（56・58）　皿Bの確実な資料は確認されていないが、蓋からその存在を窺うことができる。56の口径は17.2cm、57は22.8cmをはかり、前者の頂部は丸味を帯びる。

皿D（75・76）　高台をもち、浅く開いた口縁部の端部を外方に拡張するもので、灰釉皿(74)に類似し、施釉陶器の模倣品と思われる。２点とも焼成はやや軟質であるが、精選した胎土を用いている。

椀A（80～84）　杯にくらべ口縁部が外方に高く開くもので、口径に対し底径の小さいものを椀とした。高台をもたない椀のうち、底部成形が糸切りによらないものをAと呼ぶ。椀Aの底部外面はいずれもヘラ切り後なで調整を施す。口縁部は直線的に立ち上がり、ロクロ回転によると思われる凹凸が内外面に認められるものがある。灰白色軟質焼成のものが多いが、84は通常の須恵器同様、良好に焼成されている。

椀B（85～88）　椀Bの底部に高台を巡らせたもので、底部の成形はヘラ切りによったと思われる。高台は低く、断面形が丸味をもつのが一般的で、なかには87のように痕跡程度となったものもみられる。いずれも砂粒に富む胎土を用い、灰白色軟質に焼成されている。ただ、93・94は例外的に高くしっかりした高台をもつもので、精選された胎土を用い、焼成も堅緻である。これは出土点数もごくわずかで、口縁部の形態は不明だが、施釉陶器類の模倣品の可能性がある。

椀C（89～92）　底部を糸切りしたもので、91を除いた底部は器具を用いたよこなで調整により明瞭な高台状につくられている。口縁部の存在する89では、この種の一般的な椀にくらべて口縁部の立ち上りが直線的な傾向をもつ。口縁端部は丸くおさめ、外面に重ね焼きの痕跡を残す。概して焼成は良好だが92のように土師質に近い不良品もみられる。

高杯　出土したものはいずれも脚台部破片である。杯部との接合部から数cm下位が直径４cm程の最小径となる筒形品で焼成は良好である。

壺（95～103）　形態によりいくつかに分類できるが、出土点数が少なくここでは一括せざるを得なかった。口縁部の形態で最も多いのは、筒状の頸部から大きく外方に開き、端部を上方に拡張するもの（95・96）で、端部を断面三角形に肥厚させるもの（98）や、水平な端面を形成するもの（97）も認められる。底部は平底で高台をもつもの（99）ともたないもの(101～103)に分けられる。前者は１点だけの出土である。後者は胴部外面に平行叩きを施したあと、内外面とも叩き目をなで消すが不徹底である。102では内面の叩き目が部分的に残存しているが、同心円文とは異なり、条線をもたない。

甕（104～109）　やはりいくつかの形態が認められる。109は少ないがなかでも特徴的なもので、短く開いた口縁部とよく張った肩部をもつ大形品である。他の多くの器種の胴部内面に同心円文がみられるのに対し、この内面には当て道具の痕跡は全く認められず、よこなでを入念に施している。焼成はいずれも良好である。

壺・甕の胴部破片が多く出土している。これらの外面の叩き目はすべて平行叩き目文で、内面はほとんどが同心円文である。内面の同心円文はすり消されているものの多い。いっぽう内面には同心円文以外に格子目文（第18図174・175）、不規則な直線文なども認められる。これらのうちでは格子目文が比較的多いが、それでも同心円文にくらべれば量は極めて少ない。格子目文も同心円文と同様、木製の当て道具を用いたものと思われ、切り口の年輪痕跡が認められるもの（174）がある。

緑釉陶器　椀と皿が出土したが、いずれも小破片である。

椀（78・79）　別個体である。78はやや外反する口縁部で、端部は丸くおさめている。灰白色軟質の素地に薄く施釉されているが、風化して黒化している。79は高台をもつ底部近くの破片で、黄白色軟質の素地の全面に塗釉しており、塗った際の筆の運びが観察される。

皿（77）　口縁部上端がやや屈曲するもので、暗灰色硬質の素地に緑灰色透明の釉がかけられている。

灰釉陶器　皿が1点だけ出土している。

皿（74）　口縁上部をわずかに屈曲させ、さらに端部を外方に開く。精選された均質な胎土で、灰白色硬質の素地に淡褐色の透明釉をかける。口縁部外面の一部は、表面が乳白色に変色している。

器種		個体数			比率(%)	
食器	杯A	52			22.0	90.3
	杯B	93	93		39.4	
	杯B蓋	61				
	杯C	4	4		1.7	
	杯C蓋	2				
	椀A	16		213	6.8	
	椀B	22			9.3	
	椀C	12			5.1	
	皿A	3			1.3	
	皿D	2			0.9	
	皿B蓋	2			0.9	
	高杯	3			1.2	
	緑釉椀	2	4		1.7	
	緑釉皿	1				
	灰釉皿	1				
貯蔵器	壺	18	23		7.6	9.7
	甕	5			2.1	
計		236			100.0	

表1　下層出土土器の構成（須恵器・施釉陶器）

以上の須恵器、緑・灰釉陶器の器種別個体数とその比率を表1に示した。器種識別できた総個体数は236点で、これらのうち、食器類が90.3%にのぼる。さらに食器の中では杯Bが最も多く、全体の40%近くを占めている。

土師器　杯A、皿A・C、椀B、甕、製塩土器がある。

杯A（7～12）　高台をもたない杯を一括した。現状では高台をもつ杯Bの確実な例は確認されていない。杯Aは形態、製作技法からさらにいくつかに分けられる。7・8は不調整の平底から短かく立ち上がった口縁部をもつもので、よこなで調整を施している。いずれも全面に赤色顔料を塗っている。9・10は口縁部の大きく開くもので、底部から口縁下端までヘラ削りする。9では口縁下端にヘラ磨きを加えている。これらの口縁部上半はよこなで調整をおこなっている。11は、やや内弯する口縁部をもつ。底部から口縁端近くまでをヘラ削りしたのち、丁寧なヘラ磨きを内外面に施している。12は底部および口縁部の内外面ともよこなで調整を施し

ており、ロクロを使用した可能性がある。

皿A（15～18）　口径が13～14cm、16cm、18cmの3者にわかれる。15・16・18の口縁部はよこなで調整を施し、そのため上半がやや外反する傾向を示し、底部との境界には稜線をもつ。16の底部はヘラ削り後よこなで調整をおこなっている。17は底部から口縁端部までの外面をヘラ削りしており、その結果、他と異る口縁形態をもつ。18の内外面には赤色顔料を塗っている。

皿C（19・20）　口縁部上半をよこなでにより外方に強く折り曲げたもので、口縁部は薄くつくられている。ロクロを使用したものと思われ、底部はヘラ切り後ヘラ先で荒く部分的に磨いている。

椀B（21～24）　高台をもつ椀だが、全形のわかる個体はない。高台状態も変化があり、椀以外（たとえば皿）の器種を含んでいるかも知れない。23は比較的保存状態の良いもので、口縁部の大きく開く形態を呈している。この底部外面の中央には墨書をもつ。

甕（31～36）　口径から小・中・大の3者にわけられる。31・32は小形品で、口径13cm前後。33・34は中形品で、口径20cm前後。35・36は大形品で、口径30cm前後である。出土点数は中形品が最も多く、次いで大形品、小形品の順となる。中形、大形のものは比較的器高の高いやや細長い胴部を、小形のものは球形に近い胴部をもつと思われる。いずれも口縁端部は丸くおさめるものが多いが、端面を形成するものや、沈線を加えるもの（33）もみられる。完形に近い状態で出土した32・36では口縁部以下の外面に黒色炭化物が厚く付着しているが、底部付近には認められない。

製塩土器（25～30）　図示しうる破片をすべて掲げたが、個体数は少なく、全体で3個体程度と思われる。26・27・30は同一個体の可能性がある。胎土、形態等の特徴からA類（28）とそれ以外のB類にわけられる。製塩土器Aは胴部破片1点だけの出土で、尖底気味の底部をもつ鉢形になると思われる。器壁は厚さ6～2㎜をはかり、Bにくらべると薄くつくられている。外面は不調整で、成形時のひび状のしわがみられる。表面に黒色粒がみられるものの、胎土には砂粒を含まない。ただ、植物質の混和材を用いたらしく、器壁には小さな空洞が認められる。堅く焼成され、外表には2次的な加熱による変色がみられる。製塩土器Bは各部位の小破片があり、これによれば、口径12cm前後、高さ20cm前後の丸底をもった深鉢形になると思われる。胎土には1～3㎜前後の砂礫を多く含んでいる。外面は不調整で、成形の際の指頭圧痕を口縁部付近にとどめる。

器種		個体数		比率（%）	
食器	杯A	51	90	45.0	79.6
	杯B	3		2.7	
	皿A	8		7.1	
	皿C	4		3.5	
	椀B	21		18.6	
	黒色杯	2	3	2.7	
	黒色皿	1			
煮	甕	20		17.7	
他	製塩土器	3		2.7	
計		113		100.0	

表2　下層出土土器の構成（土師器・黒色土器）

内面は丁寧になでられている。器壁は10㎜前後と厚い。やはり２次的な加熱を受けていて、外表の変色が認められる。

黒色土器　椀と皿がある。

椀（13）　口縁部が大きく開くもので平底とみられる。内外面とも漆黒色を呈し、いずれも横方向に丁寧にヘラ磨きしたあと、口縁部内面に渦状暗文をヘラ描きしている。

皿（14）　底部近くの小片である。内面は漆黒色、外面は茶褐色を呈する。底部内面は一定方向に、口縁部内面は水平方向に丹念にヘラ磨きを施している。

土師器・黒色土器の器種別個体数と比率を表２に示した。総個体数113個で、これらは杯・椀・皿からなる食器類と、煮炊器（甕）、その他（製塩土器）にわかれる。このうち食器の占める比率が79.6%に達している。

B　上層出土土器（第11・12・13図、図版７）

各トレンチの３層から出土したもので、須恵器、備前焼、中国製磁器、土師器、瓦質土器がある。これらの大部分はＴ１・２で集中しており、下層土器と似た傾向がある。また、３層中には前代の土器が少なからず混入しているが、明確と思われるものについては対象から除外した。須恵器は勝間田焼との関連が問題となるが、ここでは須恵器に統一してあつかい、この点に関しては上下層を通じ次章で触れたい。また磁器については３層よりさらに上層でもかなり出土し、実測図にはこれらの土器も一部含めた。ただし区別は記述の中で示した。

須恵器　椀Ｃ・Ｄ、皿Ｃ、壺、甕、鉢がある。

椀Ｃ（136～141）　口径14～16cmの大形品と10cm前後の小形品にわかれる。小形品は２点認められるだけである。これらは下層須恵器椀Ｃと同器種だが、下層のものが底部に高台様のつくり出しをおこなうのに対し、上層ではその確実な例は認められなかった。口縁部の立ち上がりも下層にくらべると弯曲の度合いが大きいようである。土師質に近いものから暗灰色硬質のものまで、焼成にはばらつきが認められるが、概して良好である。器表には、よこなでの痕跡を強く残し、口縁部には重ね焼きによる色調変化がみられる(註１)。

椀Ｄ（142・143）　椀Ｃの底部に高台を貼り付けたもので、底外面には糸切り痕を残している。高台はしっかりしたつくりのものから、断面三角形のものまである。

皿Ｃ（144・145）　糸切り底をもつ小皿である。口径は８～10cmで、口縁部には椀同様、重ね焼きの痕跡がみられ、焼成良好だが土師質に近いものも一部みられる。

壺（151～157）　筒状の頸部から大きく開く口縁部をもち、肩部は丸味をもって筒状の胴部に続く。肩と胴部の境に２段の凸帯を貼りつけたものがあり(154・155)、154では、さらに耳を加える。内外面にはよこなでを施す。口縁部にはいくつかの形態がみられるが、水平に近く開いた端部を丸くおさめるものが多いようで、153は下層からの混入の可能性がある。

甕（158～162）　短く開いた口縁部はやや立ち上がる傾向をもち、口径30cm、高さ60cm程のものが多いが、これより小形のものもみられる。159は口縁部に端面を形成するが、他はすべて丸くおさめている。丸底の底部から胴部にかけての成形は叩き技法により、すくなくとも4帯に分けて成形するようである。外面の叩き目は荒い格子目が多い（第16図176～178）が、平行叩き目もみられる(158・160)。内面には刷毛目調整を加えるが、底部付近では器具を用いたよこなでを施す。いずれも硬質に焼成されている。

鉢（146～149）　平底から大きく外方に開く口縁部をもつもので、底径13cm、口径30cmをはかる。口縁端部は丸くおさめ、片口をもつ。底部は不調整、口縁部内外面はよこなでを施す。内面は使用のため平滑になっているものが多い。口縁外面には重ね焼きの痕跡がみられる。

備前焼　壺、擂鉢がある。

壺（150）　直立した頸部に小さい玉縁の口頸部がつくもので、表面、断口ともセピア色に堅く焼けしまっている。肩部内面には荒いよこなで調整を施す。

擂鉢　出土したのはいずれも櫛描条線を内面にもつ胴部の破片で、口縁部はない。

中国製磁器　白磁椀・皿、青磁椀・皿がある。163～168・173は3層出土。他に図示したものは1、2層から得られたものである。

白磁椀（163～166）　口縁部に玉縁を持つもの（163・164）と、口縁端部をわずかに外反させて丸くおさめるもの（165）とにわかれるが前者が多い。いずれも口縁部以下の外面をヘラ削り成形し、分厚い高台を削り出している。底部内面には段をもつものもある。釉も灰色に近いものから黄白色まで差がある。無文のものが多いようだが、図示しなかったものに底部内面に櫛描文を施した破片がある。

白磁皿（167・168）　167は内面に段をもって開いた口縁部破片で、端部にはわずかな面をもつ。168は小さな高台を削り出したもので内面に段がある。段の内外に櫛描文を浅く施している。

青磁椀（173）　底部の破片である。灰色の素地にくすんだオリーブ釉が高台下面までかけられている。内面には段を有し、なかにスタンプ文を向いあわせに配している。

青磁皿（169～171）　169は口縁部が稜花をなしており、底部から段をもって口縁部に移行する。灰白色の荒い胎土にやや緑がかった青色釉をかけている。口縁にそった内面に荒い櫛描文を、以下に片彫りの花を施す。

器種		個体数			比率(%)	
食器	椀 C	126			61.8	
	椀 D	16			7.8	
	皿 C	16		171	7.8	83.8
	白磁椀	10				
	白磁皿	2	13		6.4	
	青磁椀	1				
貯蔵器	壺	7				
	甕	11		19	9.3	
	備前壺	1				
調理器	鉢	9		14	6.9	
	備前擂鉢	5				
計		204			100.0	

表3　上層出土土器の構成
（須恵器・中国製磁器・備前焼）

170は口縁部以下の外面をヘラ削り成形したもので、灰白色のやや荒い胎土に169と同色の透明釉を、底部を除く内外面にかけている。底部内面には櫛状工具を用いたジグザグ文とヘラによる片彫りを施している。171は、170と同様の胎土に、より青味の強い釉を底面を除く内外面にかけている。底面外周には段を削り出している。底部内面には櫛描文がみられる。

青磁鉢（172）　白色の胎土に緑の強いオリーブ釉をかけたもので、口縁上部は外反する。内面には浅い鎬文をもつ。

須恵器、備前焼、中国製磁器の器種別個体数と比率は表3に示したとおりである。総個体数204個は須恵器椀・皿、磁器からなる食器類、備前焼壺を含む壺甕類からなる貯蔵器類、そして鉢、備前焼擂鉢からなる調理器類の3者にわけられる。食器類はそのうち83.8%に達し、磁器、備前焼の全体に占める比率はそれぞれ6.4、3.0%である。

土師器　椀A・B、皿B・D・E等がある。

椀A（119・120）　底部を糸切りするもので、胎土・底径等により須恵器椀Cの焼成不良品と一応区別されるが、なかには120のように形態上の差がなく、識別の困難なものもある。

椀B　高台をもつ椀だが、小破片ばかりで図示できるものは少ない。下層土師器椀Bの実態が不明なため、これとの関係も明らかでない。確認できる資料には底部を糸切りするものはみられない。これに分類したものには、口縁部の立ち上がりが不明な個体があり、このうちには皿も含んでいる可能性がある。

皿B（116・117）　糸切り成形した底部に高い高台を貼り付けたもので、口径10cm未満の小形品である。

皿D（110～112）　平らな底部をもつ小皿で、底部を糸切りしたものが多いが、111ではヘラ切りしている。

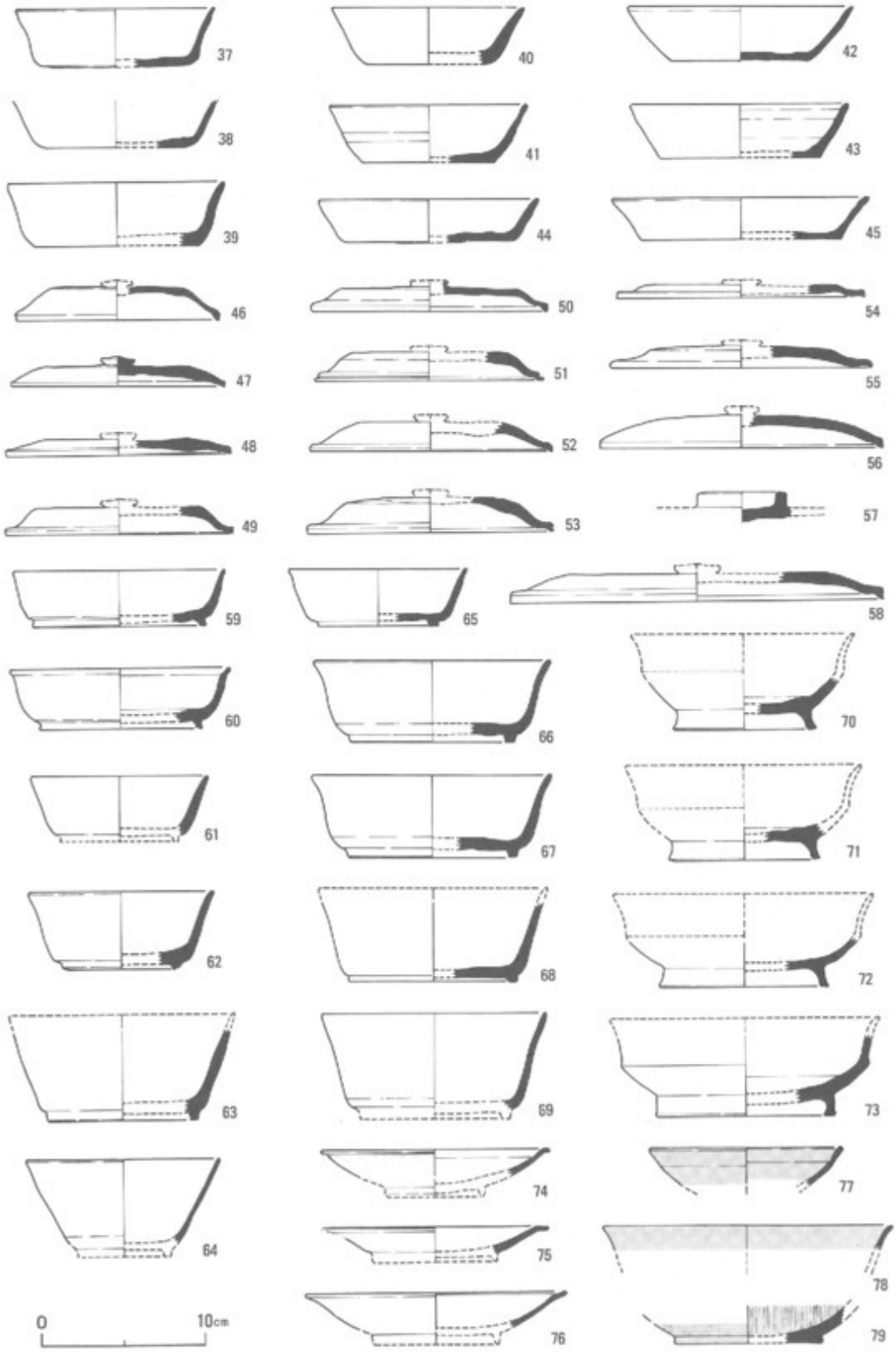
皿E（113～115）　分厚い底部をもつ小皿で、底部は糸切りする。口径9cm以外に、6cm前後のさらに小形のものもある。118も一応この種に含めたが、薄い底部から口縁部が垂直に立ち上がり、上部で屈曲して外方に開いた特異な形態をもつ。底部は糸切りされていて、1点だけの出土である。

全形の判明する皿は小皿だけだが、大形品の存在することは121などの口縁部破片の存在で明らかである。

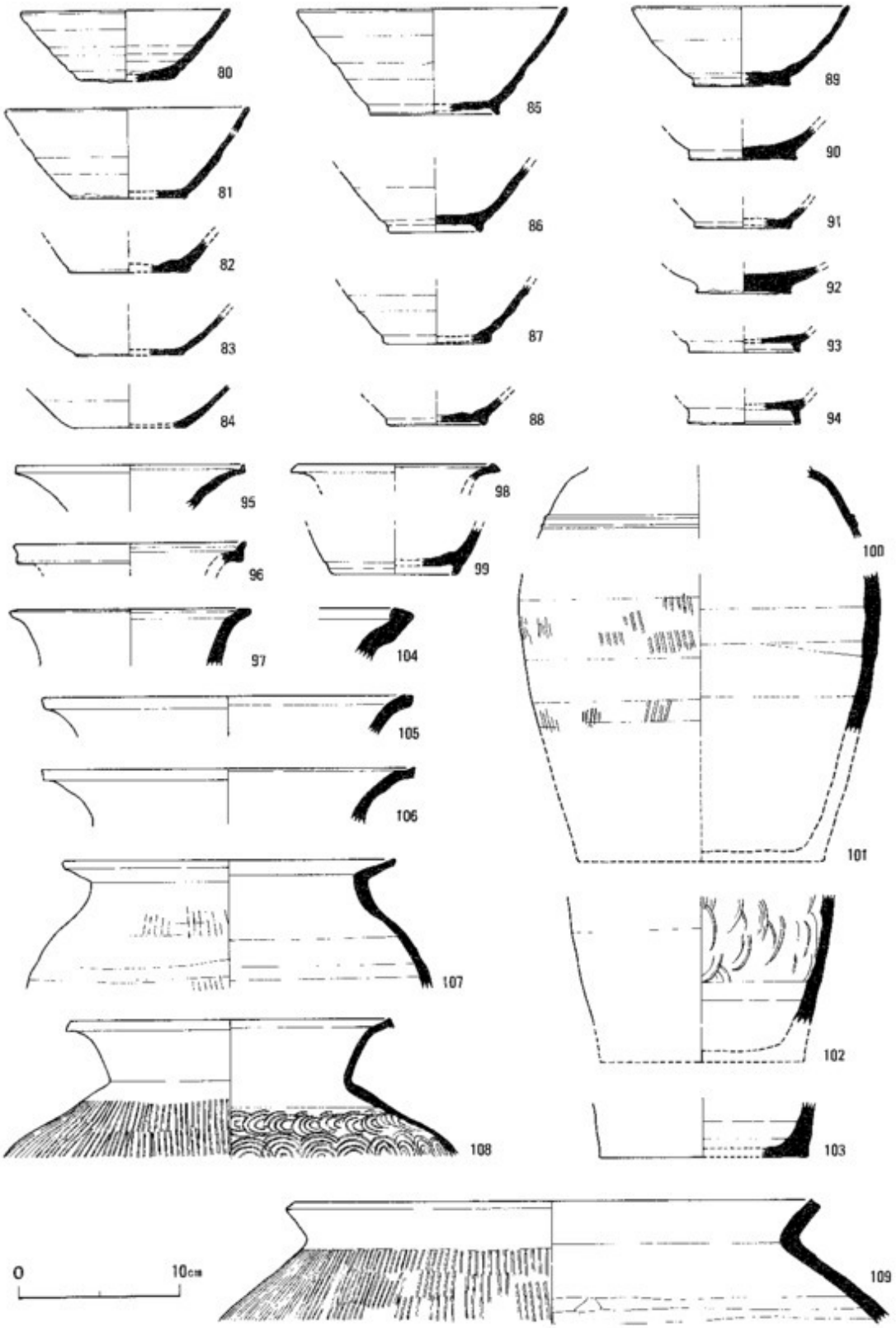
瓦質土器　断口が灰白色、器表が黒灰色ないし暗褐色に焼成された土器である。胎土には石英・長石粒をやや多く含み、かなり硬質なものから軟質なものまで存在する。なかには土師器に近い個体も認められ、典型的な瓦器と区別し

器種		個体数		比率 (%)	
食器	椀 A	18	91	15.4	77.7
	椀 B	17		14.5	
	皿 B	16		13.7	
	皿 D	25		21.3	
	皿 E	15		12.8	
煮炊器	鉢	3	26	2.6	22.3
	鍋 B	2		1.7	
	鍋 C	20		17.1	
	鍋 F	1		0.9	
計		117		100.0	

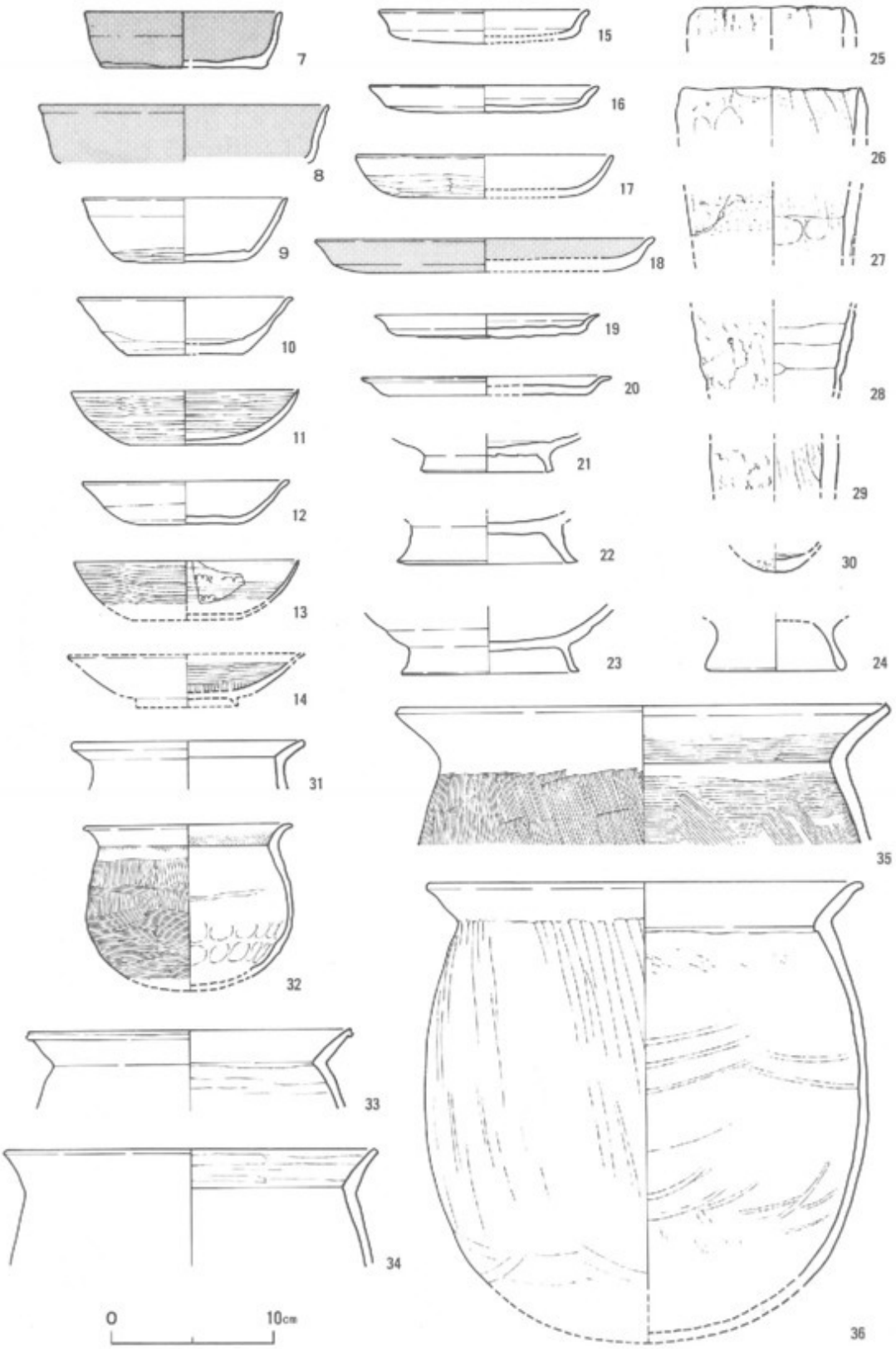
表4　上層出土土器の構成（土師器・瓦質土器）



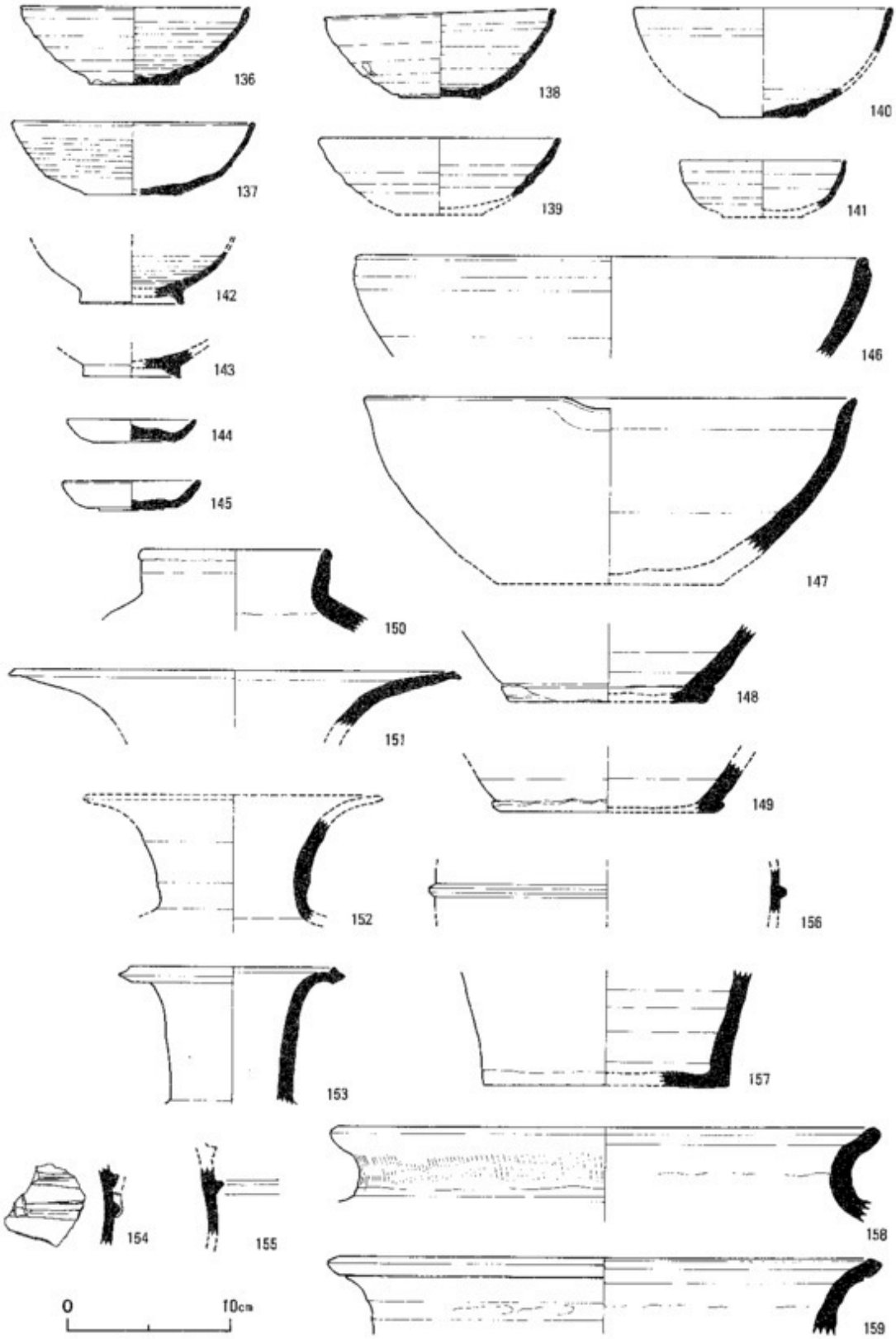
第8図　下層出土土器（43・48・50・58・61・79：T2-4a，他はT1-4a）　1：4



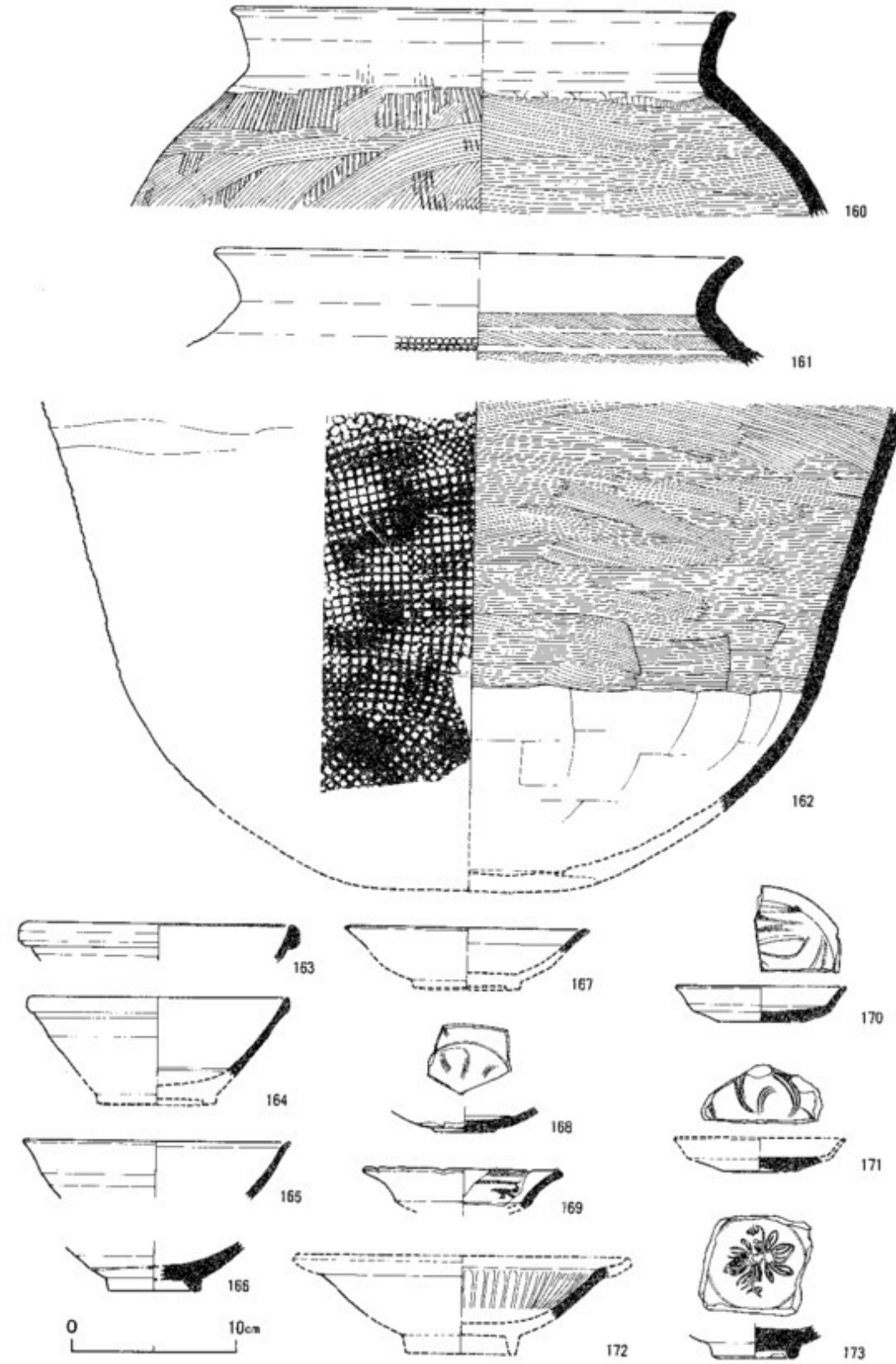
第9図　下層出土土器（TI-4a）1：4



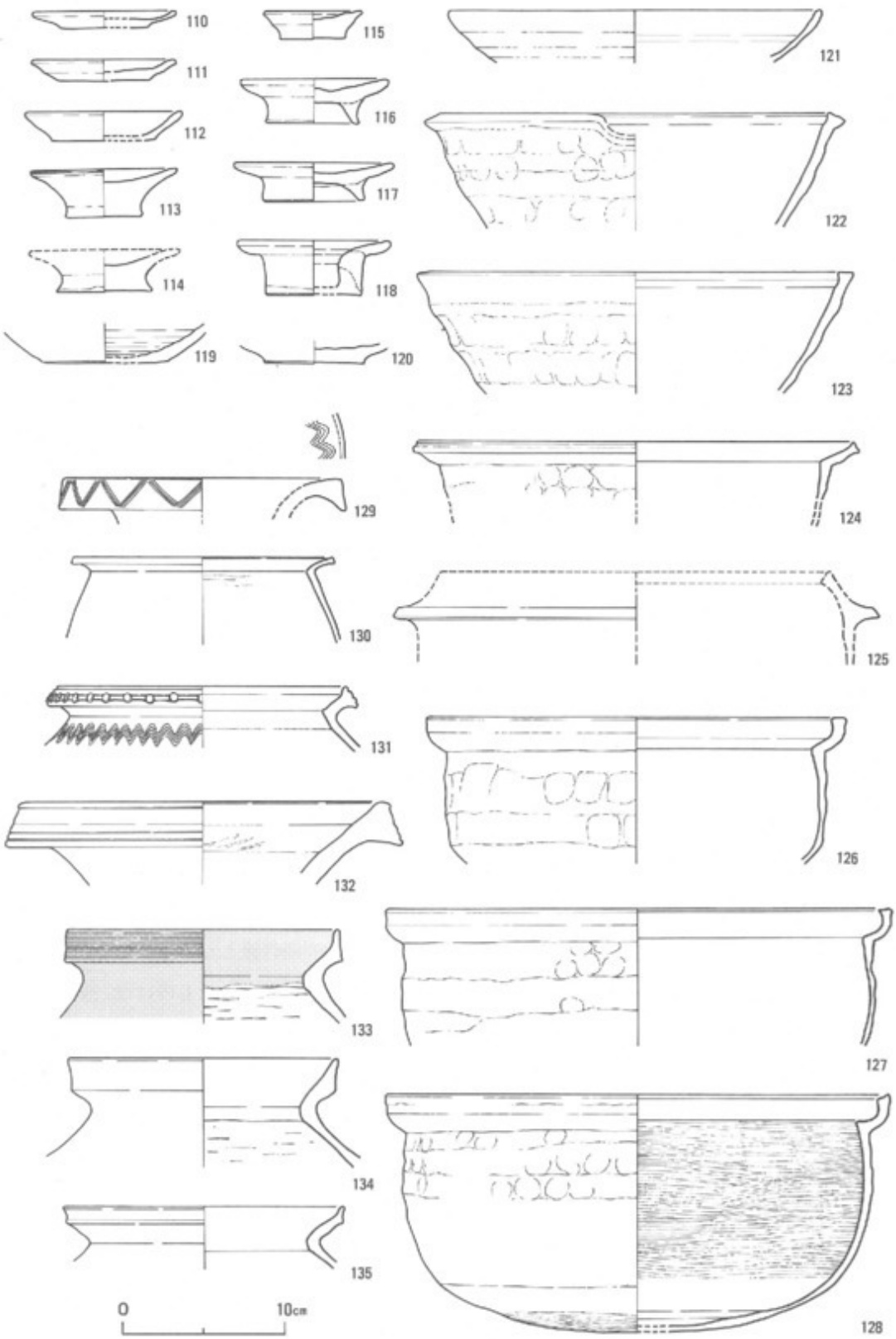
第10図　下層出土土器（14・16・20・26：T2-4a，他はT1-4a）1：4



第11図　上層出土土器　1：4



第12図　上層出土土器　1：4



第13図　上層出土土器・弥生土器　1：4

て瓦質土器とした。鉢、鍋B・C・Fがある。

鉢（122・123）　外面には粘土帯のつぎ目に沿って指頭成形痕が残り、凹凸がみられる。口縁端部には幅の狭いよこなでを施し、端面を形成する。口端部はさらに一部を外方に折り曲げて片口とする。122は口縁端部を外方にやや拡張している。内面はなで仕上げとみられ、平滑につくられている。外面の一部は剥離しており、火にかけられた痕跡を示す。

鍋B（124）　外方に開いた口縁部をもつもので、やや拡張気味の端部に沈線を浅く施したものもある。口縁部はよこなで調整、以下の外面は不調整で指頭圧痕をとどめている。

鍋C（126～128）　外方に開く口縁部を、強いよこなでによってさらに上方に屈曲させるもので、体部から底部への移行は稜をもつ。さらに口径26cmの小形と31cmの大形とにわけられる。体部外面は不調整で指頭圧痕をとどめ、底部外面と体部内面には刷毛目調整を施している。口縁から底部上半の外面には黒色炭化物が厚く付着する。

鍋F（125）　水平方向に延びた鍔が口縁部につくものだが、全形を示す資料はない。

土師器・瓦質土器の器種別個体数と比率を表4に示した。個体総数は117個で、そのうち食器の占める比率は77.7%、瓦質土器の比率は煮炊器の比率と同じ22.3%となっている。

C　弥生土器（第13図）

調査区西端のT1・2の4a層、およびT6・7の弥生時代河道中から若干量の弥生土器が出土した。T1・2からは中期中葉から後葉にかけて、河道中からは中期中葉から後期後葉にかけての土器がみられ、弥生時代にこの地区が居住地等として利用されていたことを示している。ここでは、河道出土の遺物について簡単な説明を加えておく。

129・130は中期中葉の壺と甕で、前者は口縁部をやや拡張し、端面に櫛描きの鋸歯文を施す。甕は口縁端部を拡張しないもので、やや古い様相をもつ。131は甕に似た形態の壺で、凹線文を施した口縁部には円形浮文、肩部には櫛描文で加飾した、この種の壺としては古いものである。中期後葉。以上は、河道下層から出土したものである。中層から出土したものには、器台(132)鉢がある。器台は上部の破片で、拡張した分厚い口縁部の端面には浅い凹線文を施し、内面はヘラ削り成形する。鉢は完形に近いもので、浅く開いた体部上方に段をつけて、さらに開く口縁部をもち、口縁端部をやや拡張した、後期初頭にみられる高杯の杯部に低い脚台をつけたものである。いずれも後期前葉。133～135は下層出土で、133は後期中葉とみられる甕だが、内外面に赤色顔料を塗布しており、壺として使用された可能性がある。直立した口縁端外面には浅い櫛描文を巡らせている。134も甕で、上方に延びた口縁部はやや外反する傾向をみせる。135は外方に開いた口縁部をさらに上方につまみ上げた甕で、現状では保存状態が悪く不明だが、叩き成形によるものと思われ、これらは後期後葉に属する。

D　墨書土器（第14図、図版７）

計10点の墨書土器がある。いずれも下層土器と共に出土したもので、うち１点がＴ２出土であるのを除けば、すべてＴ１から出土した。

179「呂田」　須恵器杯Ｂの底部外面。美作国府の位置する苫田郡の郡名かあるいは郷名と思われる。

180「相」　須恵器杯Ｂの底部外面。

181「井」　須恵器杯Ｂの底部外面。

182「清□」　須恵器杯Ａの口縁部外面に右から左に書く。次の字もさんずい偏とみられる。灰白色の焼成。

183「郡□」　須恵器皿Ｂの底部外面。底部から大きく開いた口縁部をもつ器形で灰白色の焼成。底面いっぱいに、２行以上に書かれている。「郡」以外の文字は読解できず、また字数も不明である。

215　須恵器杯Ｂの底部外面。底部中央部に１ないし２字が書かれているが、破片に一部がかかっている程度で、不明。

216　須恵器杯Ｂの底部外面の中央近くに１字以上が書かれているが、底部一面に黒斑が薄くみられ、また硯に転用されており、判読できない。

217　須恵器杯Ａまたは皿Ａの底部外面中央に最低１字が認められるが判読不能。

218　薄手の須恵器杯または皿と思われる底部外面に１字以上が認められるが判読不能。

23　土師器椀Ｂの底部外面中央に２字が書かれているが、判読不能。

２木製品

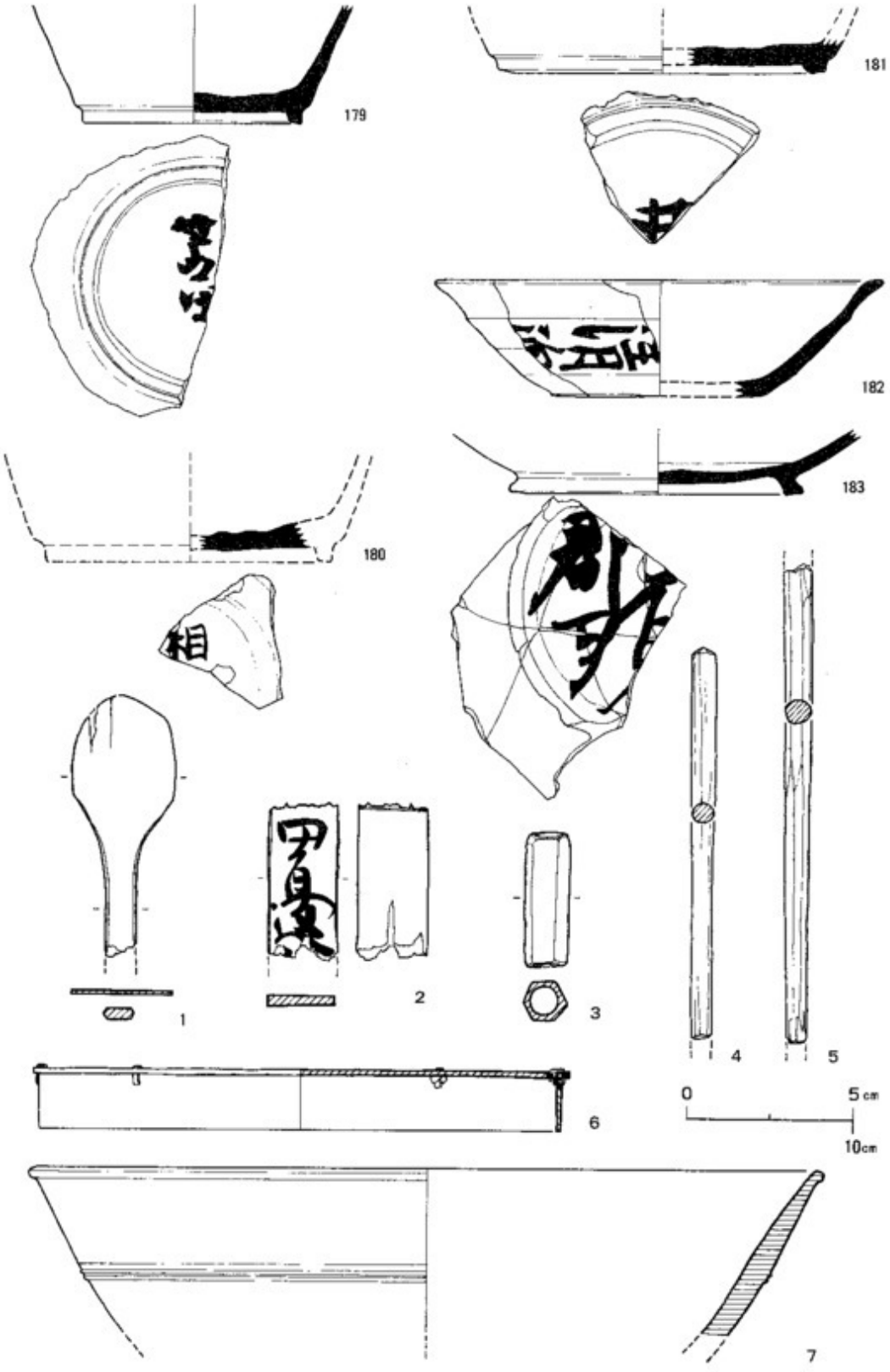
A　木　簡（第14図２）

Ｔ１の４ａ層から他の遺物と共に１点だけ出土した。幅21～22㎜、厚さ３～４㎜の杉の板材を用いた頭部の断片である。頂部は裏側から切り込みを入れて折り取った痕跡が認められる。表面には「田逸□」と墨書されている。「逸」は「逸」の異体字とみられ、苫田郡田邊郷の郷名を記したものであろう。

B　木　器（第14図１～７、第15図）

６点の木器がある。いずれも加工痕をとどめた木片と共にＴ１の４ａ層から出土した。

匙状木器（１）　杉とみられる針葉樹材を用い、厚さ1.5～4㎜の薄板を匙状に加工したものである。下端を欠損しており、現長7.9㎝。頭部幅は3.1㎝をはかり、頭部下半から柄部にかけて面取りを施す。上部ほど薄くつくられ、匙としての実用には耐えない。人形の頭部の可能性も



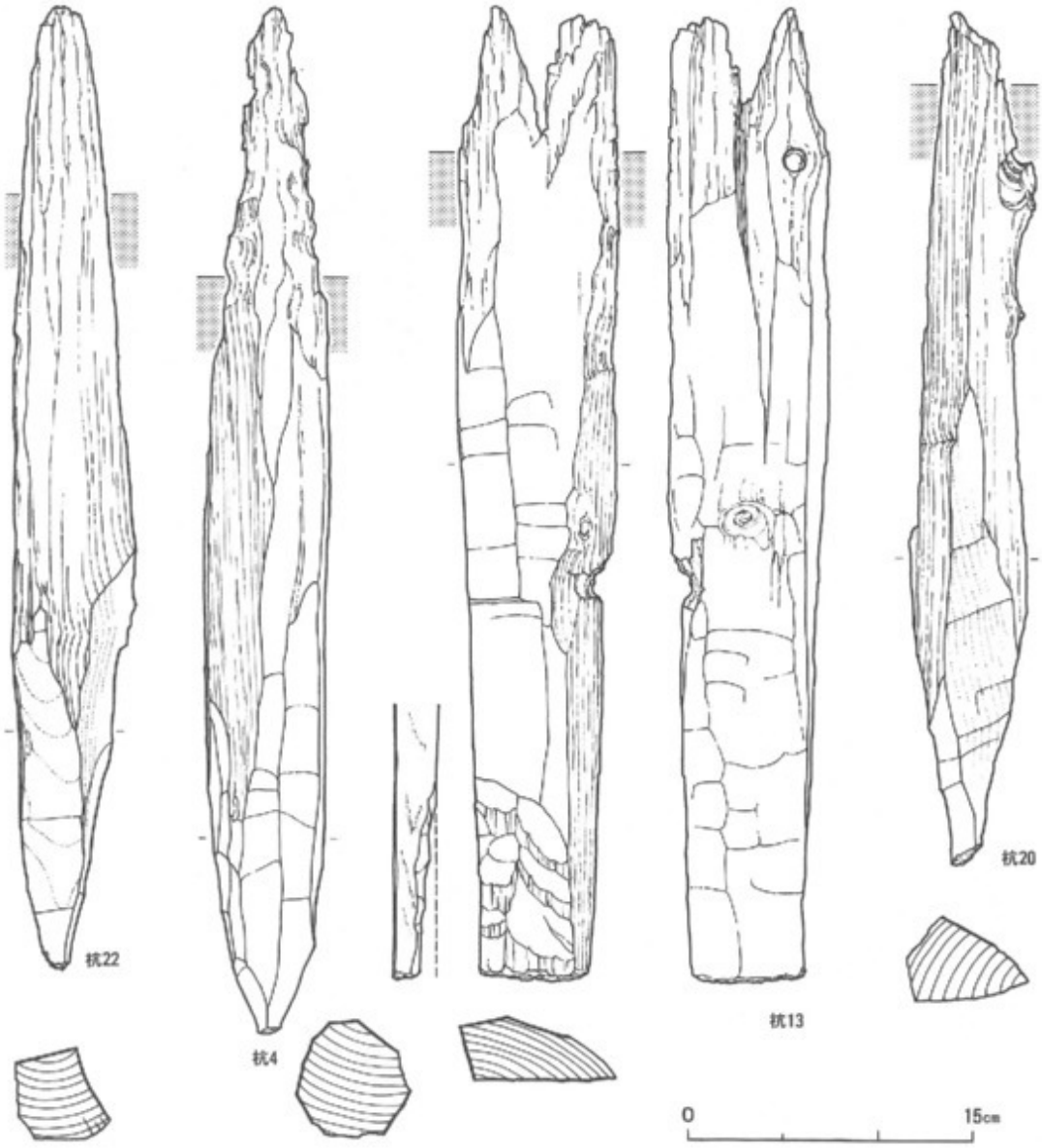
第14図　墨書土器・木製品（TI-4a層）　179～183・1～6　1：2，7　1：4

ある。

筒状木器（3）　一見、陶器を思わせる緻密な木質の六角柱形の筒状品。中央に径8㎜前後の円孔を穿っている。用途不明。

箸（4・5）　2本ある。いずれも杉らしい針葉樹を素材に用い、径9～6㎜に丁寧に削っている。4は上半部で、頂部も入念に面とりしている。

曲物（6）　直径16cmの円形薄板の片面に幅1.6cmの薄板を曲げて樹皮で止めたもので、容器の蓋として用いられたと思われる。4a層にみられた焚火の箇所から出土したもので、一部が焼けこげている。



第15図　T7弥生時代河道出土杭　1：4

刳物（7）　盤と思われるもので、ロクロで挽出している。口縁部と体部の外面に突帯を挽出す。素地のままで漆はかけられていない。

これらの国府関連の木製品以外に、T7弥生時代河道に打ち込まれていた杭がある（第15図）。土中に打ち込まれていた先端から40cm前後までは遺存状態が良好で、ここで簡単にふれておく。杭は計28本あり、大別すると杭専用としてつくられたものと、他の用材から転用されたものの2者にわけられる。後者は1点だけで、これだけが松材を用いている（杭13）。板材の一端を簡単に削ったものである。前者は広葉樹製で、直径15～20cmの丸太材を縦に4～6分割して先端を尖らせている。

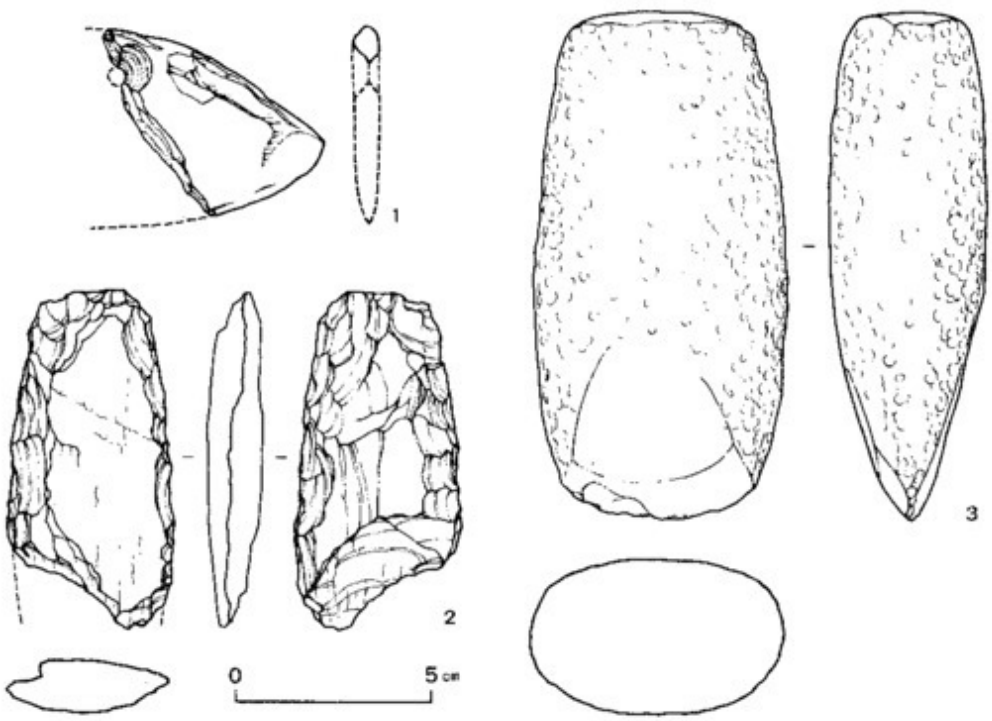
3　金属・石製品

金属製品には開元通宝が1点、石製品には国府関連の遺物はないが弥生時代の石器がある。

開元通宝（第16図、図版7）　T1の4a層から出土した。一部を破損するが、現状で外径2.45cm、重量1.7gをはかる。唐代、武徳4年（A.D.621）とされる。

第16図　開元通宝　1：1

石器（第17図）　石庖丁、打製石斧、太形蛤刃石斧がある。石庖丁（1）は結晶片岩製でT7弥生時代河道



第17図　弥生時代石器　1：2

の下層から出土した。大半を欠損している。打製石斧（2）は緑色片岩製で先端部を欠く。現長8.5cm、最大幅4.3cm、重量63gの小形品。太形蛤刃石斧（3）は珪岩製で、長さ13.1cm、幅6.5cm、厚さ4.1cmの完形品で重量547gをはかる。2がT2、3がT1のそれぞれ4a層から出土した。

4 瓦

今回出土した瓦は丸瓦と平瓦が大部分を占め、軒瓦はごく少量が出土したにすぎない。軒のうち瓦当文様が一部なりとも遺存するのは3個体にすぎず、これも図示できない小片である。瓦は小破片が多く調査区全体にわたりまばらに認められたが、破片総数約150個のうち、60%以上は調査区西端のT1・2に集中する。出土層位は下層（4a）に最も多く、次いで上層（3）となっている。瓦の記述にあたっては調査内容の公表されている美作国分寺・同尼寺の成果(註2)を参照した。

A 軒 瓦

軒丸瓦はT1の4a層から1点出土した。美作国分尼寺のIA型式と同笵とみられるもので、平坦な上面をもつ傾斜縁には凸鋸歯文を巡らせ、外区内縁の2重の圏線とY字形に開いた間弁が認められる。砂粒をあまり含まない胎土で、外表は灰黒色、断口は灰白色にやや堅く焼成されている。軒平瓦は2点あり、国分寺・尼寺のI型式にあたるが小片で細別は困難である。T8の2層とT1の3層から出土した。いずれも平瓦凸面に粘土を貼り付けて顎をつくるもので段顎と曲線顎がある。外区の2重圏線と唐草文の第3単位支葉の一部が認められる。2点とも石英・長石の砂粒を多く含む軟質焼成である。

B 丸 瓦

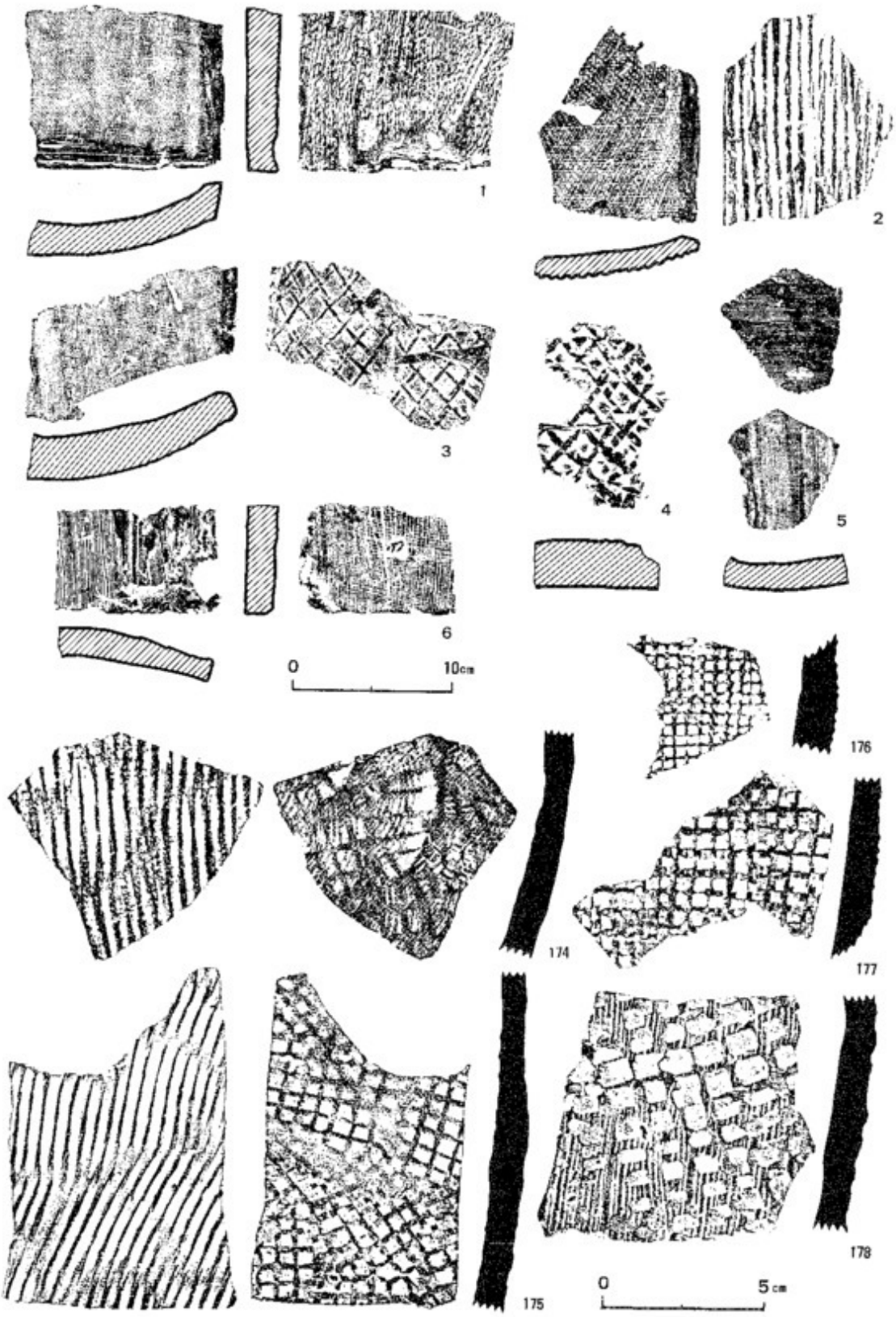
第1次成形技法は、すべて粘土板貼り付け技法によると思われる。第2次成形技法は痕跡を残さず不明である。凸面調整技法については、なで調整（b）と刷毛目調整（C）があり、bにはヘラ削り痕を部分的にとどめるものもある。Cの刷毛目方向は瓦長軸にいずれも直行する。形態はすべて玉縁式で軟質焼成が多いが、須恵質のものもある。

分類	T1・2—4a	T1・2—3
Ia	15	13
IIa	14	5
IIIb		1
IVa		3
IVb	1	1
Vb	1，(24)	4，(12)
Vc	(2)	3
計	31，(26)	30，(12)

表5 丸・平瓦の構成
（数字は破片数、括弧内は丸瓦）

C 平 瓦（第18図）

第1次成形技法は丸瓦と同様、すべて粘土板貼り付け技法と思われるが、桶巻き作りを示す資料は見あたらない。第2



第18図　平瓦・須恵器拓影（1・2・174・175：T1-4a，3：T2-3，4～6：T1-3，176～178：T2-2）
瓦1：4，須恵器1：2

次成形技法には、縄叩き目（Ⅰ）、平行叩き目（Ⅱ）、最大対角長が1.0cm未満の小形斜格子叩き目（Ⅲ）、同対角長が2.0cm前後の大形斜格子叩き目（Ⅳ）、叩き目不明（Ⅴ）の5群があり、さらに凸面調整技法は不調整（a）、なで調整（b）、刷毛目調整（c）の3類にわかれる。これらを組み合わせて分類した。この分類による個体数を丸瓦も含めて表5に示した。平瓦ではⅠaが最も多く、次いでⅡa類もかなり多く存在する。Ⅴcの刷毛目方向は長軸に平行するものと直交するものがある。焼成は軟質から須恵質まで存在するが、須恵質のものはⅢ～Ⅴ類に認められる。

以上の瓦のうち、美作国分寺・尼寺とくらべ特徴的なことは凸面調整技法c類が丸瓦・平瓦の相方にわたり存在することである。c類の瓦には須恵質焼成のものが認められることから、本類は今回出土した瓦のなかでは新しい手法とみられ、国分僧寺・尼寺にくらべより新しい時期まで瓦葺き建物が存在した可能性が認められる。

5 自然遺物

T1-4a層からは以上記した人工遺物の他に動物遺体と植物遺体が検出された。

動物遺体には鹿角と馬歯骨がある。鹿角は基部近くの断片が1点あり、人為的な切断を上部に受けた可能性もある。馬歯骨は小断片が少量出土したにすぎない。これらはいずれも表面には藍鉄がかなり付着しており、出土時には鮮やかな青色を呈した。共に出土した土器や木製品の一部にも付着が及んでいた。

植物遺体としては種子類がある。特にウリの一種とみられるものが4a層下部で検出された焚火跡付近から多量の籾殻とは別に、これまた多く出土した。食用に供したものであろう。また、内層の土壌サンプル中には、雑草と思われる微小な種子が検出されたが、以上の同定については未了である。

註

(1) 須恵器椀C底部の糸切り痕に示されたロクロの回転方向は、T1－3層出土の観察可能な47個体のうち70.2%にあたる33個体が時計回りを示し、残り29.8%が反時計回りである。

これは、椀の内面にしばしば残される成形痕と考えられる渦巻状を呈した指先の軌跡の方向と一致し、ロクロにより挽出成形（本書p.36）の際の回転方向と同じである。

(2) 湊　哲夫『美作国分寺跡発掘調査報告』1980・『美作国分尼寺跡発掘調査報告書』1983

瓦の観察あたっては氏の教示を得た。

V 考　　察

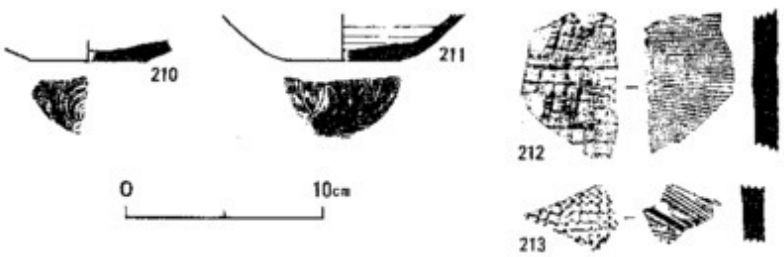
今回の調査は美作国府跡の一画を調査したにすぎないが、調査により明らかとなった特徴ある事実についてまとめ、若干の考察を加える。

1 遺　　跡

調査区内で、平安時代を主体とする各種遺物が多量に検出されたのは、T 1下層の斜面上の堆積土中からであった。前章に記した、自然遺物を含む遺物種類の豊富さからみて、この部分はごみ拾て場として利用されたものと考えられる。これらの遺物に含まれた木簡・墨書土器・瓦等の官衙的な性格を帯びたものも本来は、斜面上方の台地上に存在したもので、これは台地上に国庁の位置が推定されれきたことと一致する。T 1東端の流水は、溝を穿つことなくそのまま放置され、山側に杭を打ち込んでいたにすぎない。このようなT 1下層の状況からみて、国庁域東限はT 1以西にもとめられる。

国府域については、それを画する施設は何ら検出されず、現存する条里地割に沿ったとみられる遺構も国府関係としては確認されなかった。一方、条里地割自体に関してT 4で検出された、現用水の旧河道出土土器（第19図）は上層出土の土器群に属することが明らかである。また、旧河道西岸壁が3層中から始まること、そして調査区全体にかなりの厚さをもって上層が覆っていて、3層上面は現地形にかなり近いものとなっていることから、すくなくとも下層堆積後に大規模な整地作業を伴なう地割りが実施されたとみて間違いない。3層中には、T 2で酸化鉄層が観察されたのを初め、T 9では水田と考えられる遺構すら検出されており、T 2以東では、この地割りは水田造成に伴なうとみられる。ただし、T 1の厚い造成土中には鍋等の煮炊器が多く含まれることからみて、付近に居住地が存在したものと思われ、土地の改変が水田のみに関わったとはいえない。

今回の調査結果から国府域は、区画する溝等の施設を本来もたない概念的なものであった可能性も指摘できる。これらを含めた検討は、さらに今後の諸調査の課題として残される。上層の性格を、水田開発を含む土地の再編に結びつけて評価する場合、国府存続期は土層のうえでは下層までに限られることになる。そこで、次に下層・上層土



第19図　T 4 旧河道下層出土土器　　1：4

器を中心に所属年代について検討する。

2 遺　物

A　下層土器の年代

いくつかに分類した器種の内部、および器種間の一部に時期差と思われる差異が認められ、下層には数時期の土器群が混在しているとみられる。前者には須恵器杯A・B、皿A、壺、甕と土師器杯A、製塩土器があり、後者としては須恵器杯A・Bと椀A・B、および椀Cとの関係、土師器皿Aと皿Cなどが主なものである。もちろん、これら新旧の様相を示す土器が本来どのような共伴関係をもっていたかは、本調査で直接に明らかにすることはできない。ここでは下層土器群のおよその時期幅を指摘するにとどめる。

須恵器杯Aでは、口縁部が開く形態や底面のヘラ削り成形は他にくらべて新しい傾向と考えられ、これは皿Aのうちの同様な成形を施すものについてもあてはまる。これらは平安時代中頃と考えられる。杯Bのうち大半を占める、高台断面がやや丸味を帯びたものは平安初頭から前半までと考えられ、奈良時代中頃と思われるものも存在するが、ごく少量である。壺・甕にも形態差が認められ、奈良時代から平安時代まで幅をもつが、主体は平安中頃と考えられる。これらの胴部破片のうち格子目など特徴ある叩き目を内面にものものが注意されたが、格子目をもつものは美作国府跡以外に真庭郡落合町赤野遺跡A－15・8号ピット、久米郡久米町久米廃寺からも出土しており、奈良末から平安初期のものとされている(註1)。一方、壺・甕のうち、壺101のように筒状胴部の外面に浅い平行叩き目をとどめるものや、甕109は最も新しいと考えられる一群で、椀Cと共に上層須恵器との関連がうかがえる。この点については後述する。土師器杯Aおよび皿Aのうち、赤色顔料を塗付したものは奈良時代後半に属する。他は平安時代とみられるが、その中でもやや時期差があるようで、特に杯12は製作手法の点で最も新しく考えられる。製塩土器のうち、Aは薄手で備讃瀬戸地域で倉浦式（註2）と呼ばれるものに類似する。Bは平安時代に属すると考えられるが、同地域では未知のものである。いずれも美作国府に関する生産物流通の一端を示すものである。

須恵器椀A・B・Cは、杯A・Bより新しい器種で、椀のなかでもCはさらに新しく位置づけられる。これらは形態のみならず、焼成の点でも三者に分けられ、時期差を示すと考えられるが、相互の共伴関係についてはここでは明らかでない。他に土師器皿CはAより新しく、平安時代に属すると思われる。下層土器に一部みられた奈良時代に属する土器は量的には少なく、主体は平安時代に属するものだが、かなりの時期差をもつ。下限については、須恵器椀Cなどからなる一群の土器の年代観にかかわるが、共に出土した施釉陶器・黒色土器はいずれも10・11世紀代のものとみられ、9世紀から11世紀にかけての土器が主体を占めると考えられる。

B　上層土器の年代

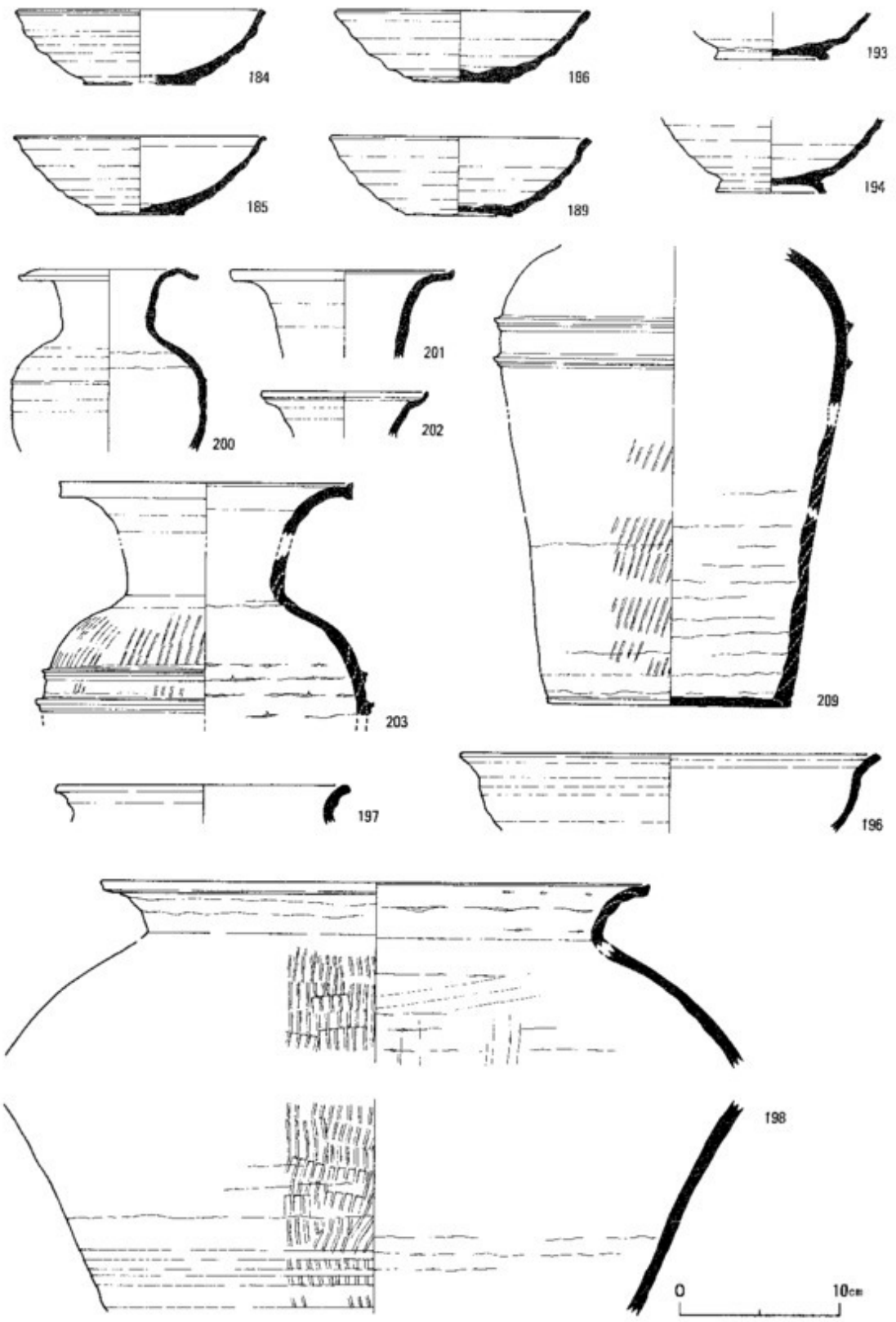
上層須恵器の器種構成は椀C・D、皿C、壺、甕、鉢からなる。前章でも記したように3層中には、それ以前の土器も混入しており、なかには識別の困難なものも存在する。たとえば、壺153は恐らく奈良時代に属するもので、これらを除いた須恵器はいずれも勝間田焼として知られるものである。勝間田焼の研究は、わずかな窯跡の発掘調査例を除いて大半がそれらの表面調査等によっているのが現状である。伊藤　晃氏によれば、現在20数基の窯跡が確認されており、器種構成は椀を主体とし、小皿、鉢、壺、甕などからなり、12世紀前半頃から操業され始め、14世紀には廃業されているようだとされる（註3）。ただ、勝間田焼の時期別の細分は未了で、上層土器の年代の位置付けは、共伴する中国製磁器や備前焼等の遺物にたよらざるを得ない。3層からの出土が確実な備前焼のうち所属時期を知ることができる資料は1点の壺(150)だけである。この口縁部の形状は、間壁忠彦・間壁葭子両氏の編年（註4）によれば、III期に属するとみられ、鎌倉時代後期、13世紀頃と思われる。磁器については、青磁椀173がやや新しくなる可能性があるが、他はいずれも12～13世紀に属すると考えられる。

以上、下層、上層のおおよその年代について検討したが、次に下層のうちでも最も新しいと考えた一群の土器と上層の勝間田焼との関係について検討を加える。

C　勝間田焼

下層土器のうち椀C、壺・甕の一部（95・96・101～103・109）からなる一群の土器は、上層の勝間田焼に類似する。調査時に、底部に糸切り痕をとどめる椀Cの存在に気付き、上層からの混入の可能性も含めて出土状態には慎重な注意をはらったが、4a層中からの出土は1例にとどまらず確実なもので、椀以外の器種についても壺・甕の存在が明らかとなり、現状では小皿、鉢を欠くものの、一定の組み合わせをもつ土器群が下層に存在することがわかった。この下層の一群は上層の勝間田焼にくらべ、いくつかの相違点をもつ。その第1は椀の形態で、高台風の底部のつくりと直線状に開く口縁形態を示す。第2は壺・甕にみられる叩き目が、いずれも特徴ある浅い平行叩き目だけで格子目文が皆無であること。第3は壺・甕の口縁部は、端面を形成する鋭利なつくりを呈し、上層のもののように丸くおさめる手法をとらないことである。一方、器種構成と器種内の形態の類似、甕・壺などにおける内面調整を初めとする製作手法の一致など、基本的には共通する点が多く、これら下層の土器群もまた勝間田焼の範ちゅうに含まれるものである。両者は、本遺跡では上述のように層位的関係として認められ、勝間田焼のもつ時期差のひとつである可能性が強いのだが、この点を検証するために窯跡出土の資料をとりあげる。

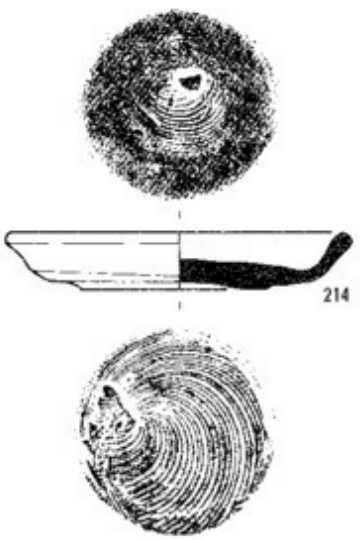
第20図に示したのは、美作国府跡から東に約11.5km離れた、勝田郡勝央町戸岩所在、戸岩古窯址群から1982年に採集された、ほぼ一括とみられる資料の一部である（註5）。これらの資



第20図　勝央町戸岩窯址採集の勝間田焼　1：4

料は、従来多く採集されてきた勝間田焼とやや異なるもので、その特徴は次の通りである。壺・甕・鉢などの器種を通じて口縁部などに稜線をもつ鋭利なつくりを示すこと。この傾向は大半の椀口縁にも認められる。外面の叩き目は、すべて浅い平行叩き目であること。椀は口径15～16cm、器高5cmと浅く、口縁部が直線的に開くこと。鉢の口縁部が外反する特徴ある形態を示すこと。壺が豊富に認められ、発達しているように思われること。以上の5点である。これらの戸岩窯製品と下層の勝間田焼は、完全に一致するわけではないが、重要ないくつかの特徴が共通しており、戸岩窯例は、勝間田焼の層位的な差異を窯跡から証明するもので、現状では勝間田焼の最古の型式と考えられる。戸岩窯址の年代については、直接示す資料はないが、上層の勝間田焼にほぼ比定される勝田郡勝央町進上谷窯址が12世紀中葉に考えられていること(註3)、また讃岐・播磨の諸窯例(註6)との比較から、ここでは11世紀後半頃と考えておく。従って、下層勝間田焼の年代観から国府存続期は11世記末頃と推定される(註7)。

さて、これらの勝間田焼の製作技法の一端を示す資料が上層中から得られたので触れておきたい。第21図はT2－3層出上の小皿Cである。上面中央にも糸切り痕をとどめる例で、上下両面の糸切り方向は一致し、時計回りのロクロ回転を示す。上面のものは小皿成形前の糸切り痕で、このことはロクロ上に置かれた1個体の粘土上から連続して複数個の小皿が製作された可能性を強く示すと同時に、ロクロによる水挽成形によるものであることを証明するものである。こうした上面の糸切り痕跡は、成形およびよこなで調整により消されてしまうのが常であるが、本例はこれが中心に及ばず偶然に残されたもので、他に数例存在する。椀C・Dではこのような痕跡を残さないが挽上部分が大きいために消されたもので同様の成形法によると推定される。



第21図　小皿Cの糸切り痕　1：2

註

(1)　岡田　博「美作国府跡(補遺)」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』) 1978 p.101

(2)　近藤義郎『土器製塩の研究』1984 p.134ほか

(3)　伊藤　晃「山陽路(岡山・広島・山口)の古代中世窯」(『日本やきもの集成9』) 1981 p.96

(4)　間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(1)～(3)」(『倉敷考古館研究論集1・2・5』)1966～1968

(5)　長船忠夫氏の採集による。戸岩窯址群はその後、岡山県教育委員会が発掘調査を実施した。資料の掲載については長船氏および調査担当者の岡田 博氏の承諾を得た。また、他の窯跡採集品の観察については勝間田焼研究会の調査でその機会を得た。

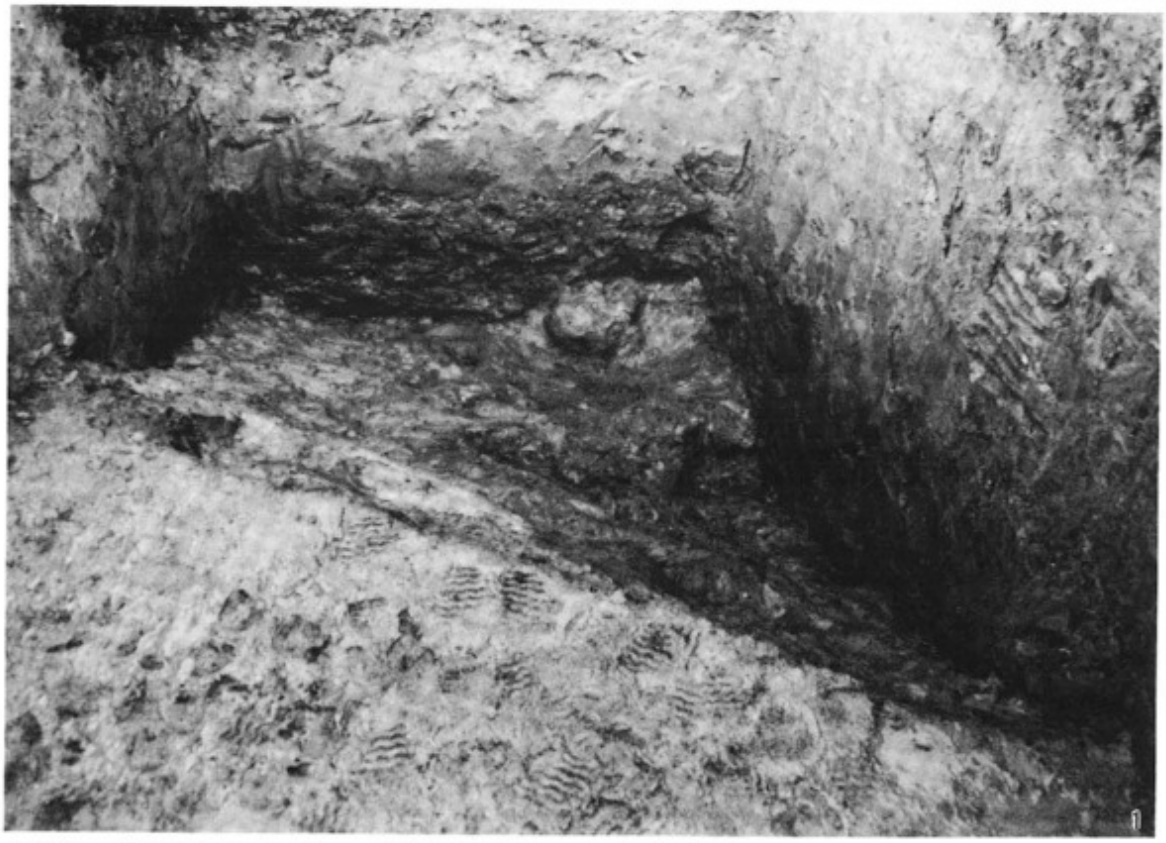
(6)　渡部明夫「讃岐国の須恵器生産について」(『鎌山猛先生古稀記念古文化論攷』) 1980 pp.499～536、大村敬通「播磨の古代窯」(『日本やきもの集成9』) 1981 pp.91～93

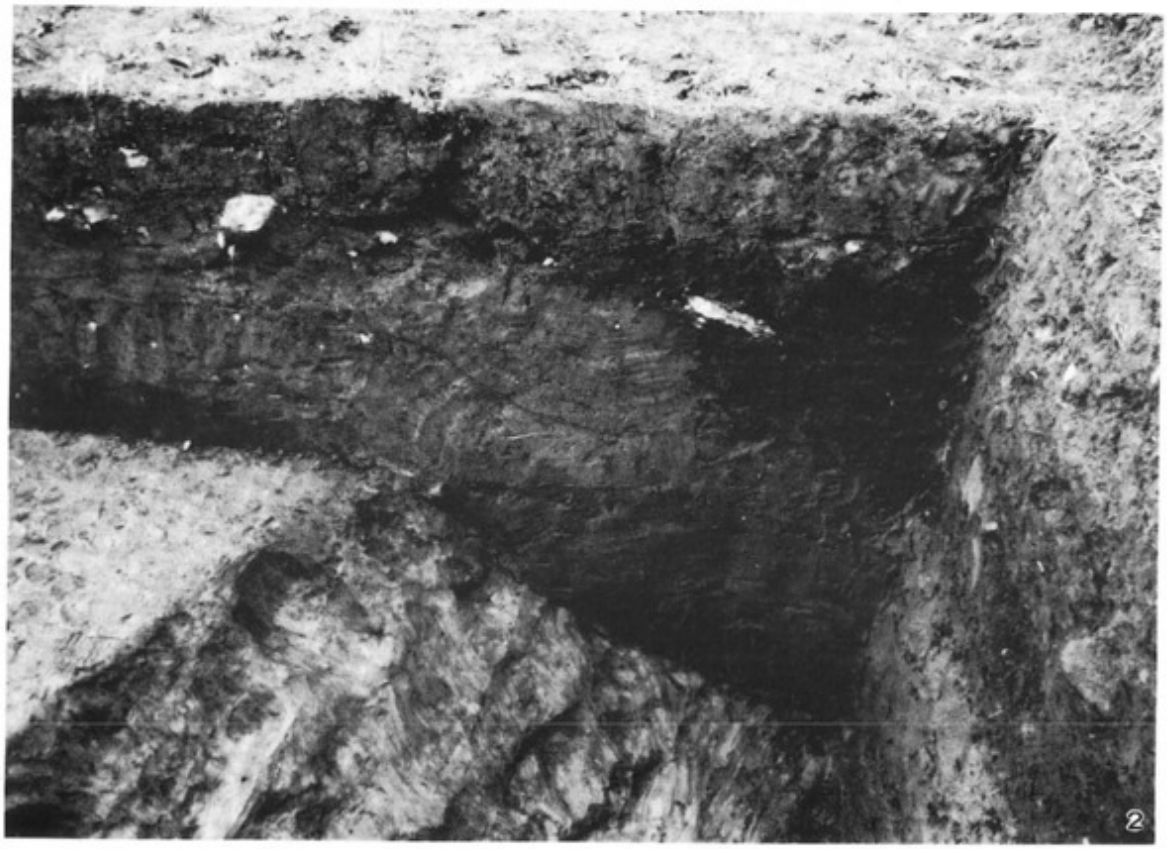
(7)　従って、いわゆる国府Ⅲ期は再検討の必要が生じる。また、平安末～鎌倉初頭と推定される美作国分二寺の廃絶期との間に瓦c類の存在を考えた場合、矛盾が生じることとなり、この検討もまた今後の課題として残される。

図　版

1　調査区遠景（東から）　2　T 1（第4層の掘り下げ，南西から）

1　T1（第3層下面，東から）　2　T2（西から）





1　T４ 旧河道（西から）　2　T４　旧河道内堆積土層（南から）

1　T6・T7 土壙群（東から）　2　T6・T7 弥生時代河道（東から）

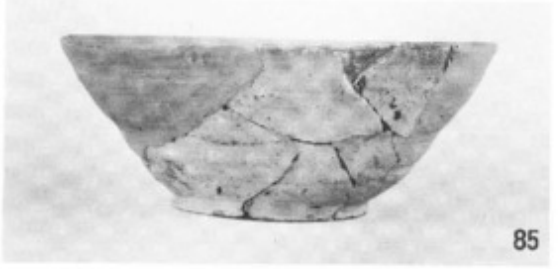
1　T７ 弥生時代河道（北東から）　2　T８（西から）

62

66

67

80


85

39

44

7

9

11

12

19

32

36

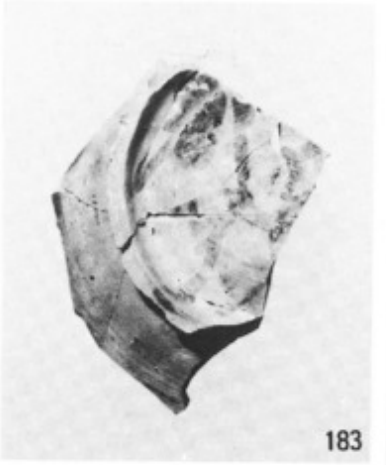
土　器（1：3）

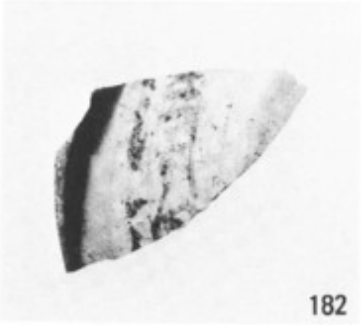
214

138

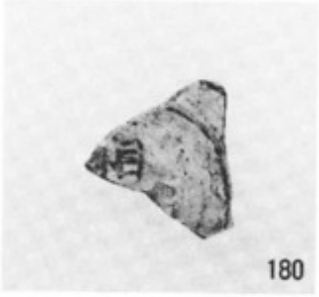
128

179


183


182

181


180

184

2a

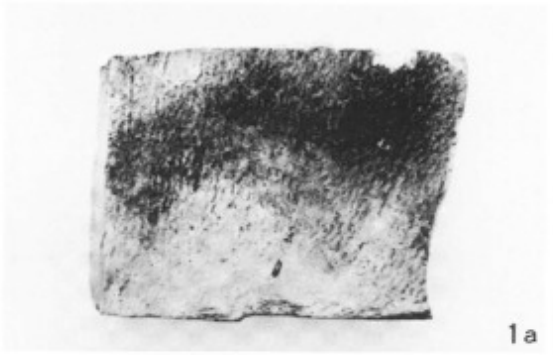
2b

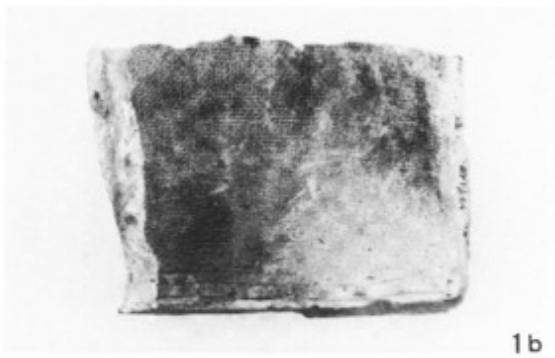
1

a

b

土　器（1：3）・墨書土器（1：2）・木製品（木簡1：1，木器2：3）・銭貨（1：1）

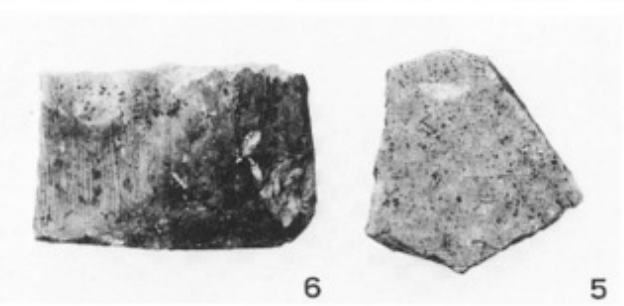

1a


1b

2a

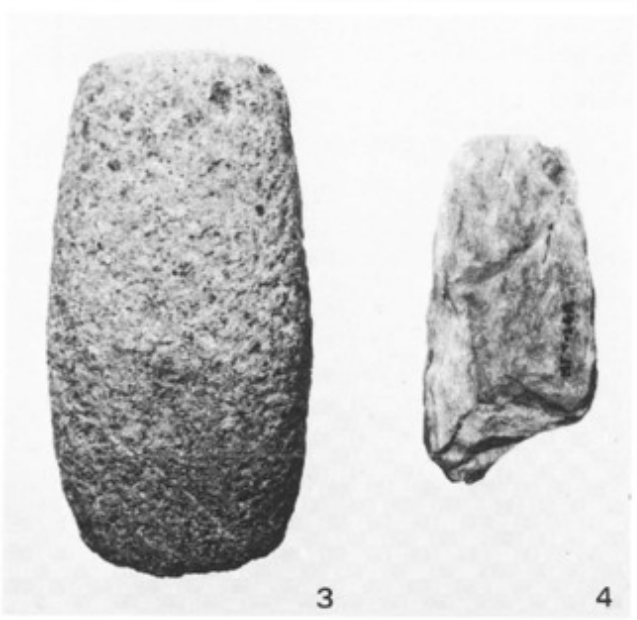
2b

4


6

5

3


3

4

1

平　瓦・石　器（1：3，1：3）

美作国府跡発掘調査報告
—総社・小原線道路改良工事に伴う発掘調査—
津山市埋蔵文化財発掘調査報告第15集

1984年3月31日発行
発　行　津山市教育委員会
岡山県津山市山北520
印　刷　有限会社　行廣印刷
津山市川崎82—3